

久米高畠遺跡 74 次調査 筋違 S 遺跡

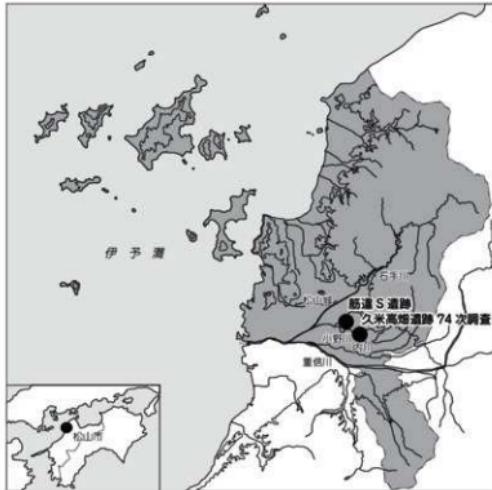
国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2022

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

く め たかばたけ
久米高畠遺跡 74 次調査
すじかい
筋違 S 遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2022

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

序　言

松山平野東部に位置する久米・福音寺地区は、松山市内でも有数の遺跡地帯として知られています。とりわけ、久米地区内では来住廃寺跡や政庁をはじめ数多くの官衙関連施設が発見されています。

今回報告する久米高畠遺跡74次調査は、来住廃寺寺域内における重要遺跡確認調査として実施しました。その結果、官衙に関連する資料は残念ながら得られませんでしたが、弥生時代中期や後期の土坑が発見され、来住台地上に展開する弥生時代集落の広がりが知れる貴重な資料を得ることが出来ました。

また、福音寺地区に所在する筋違S遺跡は、個人住宅建設に伴い実施した本発掘調査で、古墳時代や中世の建物址を発見しました。これらの成果は、同地区内における該期の集落構造や変遷の解明に役立つものといえます。

このような成果をあげることができましたのも、市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。本書が文化財保護や教育文化の振興、さらには埋蔵文化財の調査・研究の一助となれば幸いです。

令和4年3月15日

松山市教育長

藤田　仁

例　言

1. 本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが国庫補助を受け、平成24年度に久米官衙遺跡群内にて実施した重要遺跡確認調査と、同30年度に実施した個人住宅建設に伴う本発掘調査の調査成果をまとめた調査報告書である。
2. 遺構は、呼称名を略号化して記述した。
掘立柱建物址：掘立、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S P
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした方眼北で世界測地系に準拠した。
4. 本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（2006）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や実測図の縮分は、縮分値をスケール下に記した。
6. 報告書作成に伴う遺物の復元・実測・製図及び遺構の製図は、整理担当者である宮内 慎一・山本 健一の指導のもと、岡崎 政信、田崎 真理、木下 奈緒美、篠原 紗、越智田 美紀、富谷 英子、寺尾 いずみ、渡部 美佐緒が担当した。
7. 本書掲載の遺構写真は調査担当者の小笠原 善治と山本、及び大西 朋子が撮影し、遺物写真の撮影及び写真図版作成は大西が担当した。
8. 調査における国土座標軸測量は、セントラルエンジニアリング株式会社（久米高畠遺跡74次調査）と有限会社四国測量設計（筋違S遺跡）に業務を委託した。
9. 本書の執筆は第1・2・3・5章を宮内が担当し、第4章は山本が担当した。編集は、宮内が担当した。なお、浄書は平岡 直美が行った。
10. 本書で作成した図面・記録類及び出土品は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

本文目次

第1章 はじめに.....	[宮 内]	1
第1節 調査に至る経緯.....	1	
第2節 調査・整理及び編集刊行組織.....	2	
第2章 遺跡の概要.....	[宮 内]	4
第1節 遺跡の立地.....	4	
第2節 歴史的環境.....	5	
第3章 久米高畠遺跡 74次調査.....	[宮 内]	9
第1節 調査の経緯.....	9	
第2節 層 位.....	10	
第3節 遺構と遺物.....	14	
第4節 小 結.....	21	
第4章 筋違S遺跡.....	[山 本]	25
第1節 調査の経緯.....	25	
第2節 層 位.....	27	
第3節 遺構と遺物.....	29	
第4節 小 結.....	38	
第5章 調査の成果と課題.....	[宮 内]	43

挿図目次

第2章 遺跡の概要

第1図 松山平野の地形概要図（縮尺1:200,000）	4
第2図 周辺遺跡分布図（縮尺1:20,000）	7

第3章 久米高畠遺跡74次調査

第3図 調査地測量図（縮尺1:250）	9
第4図 久米高畠遺跡74次調査周辺遺跡分布図（縮尺1:1,000）	11
第5図 東壁・北壁土層図（縮尺1:40）	12
第6図 道構配置図（縮尺1:40）	13
第7図 SD1測量図（縮尺1:40）	14
第8図 SD2測量図（縮尺1:40）	15
第9図 SD3測量図（縮尺1:40）	
第10図 SK1測量図（縮尺1:40）	16
第11図 SK1出土遺物実測図（縮尺1:4、1:3、1:2）	17
第12図 SK2測量図（縮尺1:40）	
第13図 SK2出土遺物実測図（縮尺1:4、1:2）	18
第14図 柱穴測量図（1）（縮尺1:40）	19
第15図 柱穴測量図（2）（縮尺1:40）	20
第16図 柱穴出土遺物実測図（縮尺1:4）	
第17図 包含層出土遺物実測図（縮尺1:4、1:3）	21

第4章 筋違S遺跡

第18図 周辺遺跡分布図（縮尺1:5,000）	26
第19図 北壁・東壁土層図（縮尺1:50）	28
第20図 道構配置図（縮尺1:100）	29
第21図 掘立1測量図（縮尺1:50）	30
第22図 掘立1出土遺物実測図（縮尺1:3）	31
第23図 掘立2測量図（縮尺1:50）	
第24図 掘立2出土遺物実測図（縮尺1:3）	32
第25図 掘立3測量図（縮尺1:50）	
第26図 SK1土層図（縮尺1:20）	
第27図 SK2測量図（縮尺1:20）	33
第28図 SK3測量図（縮尺1:20）	
第29図 柱穴配置図（古墳時代）（縮尺1:200）	34
第30図 柱穴測量図（古墳時代）①（縮尺1:30）	

第31図 柱穴測量図（古墳時代）②（縮尺1：30）	35
第32図 柱穴配置図（中世）（縮尺1：200）	
第33図 柱穴測量図（中世）①（縮尺1：30）	36
第34図 柱穴測量図（中世）②（縮尺1：30）	37
第35図 SP52出土遺物実測図（縮尺1：2）	
第36図 第V層出土遺物実測図（縮尺1：3）	
第37図 層位不明出土遺物実測図（縮尺1：3）	38
第38図 筋違N・S位置図（縮尺1：200）	39

表 目 次

第1章 はじめに

表1 調査地一覧	2
----------	---

第3章 久米高畠遺跡74次調査

表2 溝一覧	22
表3 土坑一覧	
表4 柱穴一覧	23
表5 SK1出土遺物観察表（土製品）	
表6 SK1出土遺物観察表（石製品）	24
表7 SK2出土遺物観察表（土製品）	
表8 SK2出土遺物観察表（石製品）	
表9 柱穴出土遺物観察表（土製品）	
表10 包含層出土遺物観察表（土製品）	

第4章 筋違S遺跡

表11 堀立柱建物址一覧	40
表12 土坑一覧	
表13 柱穴一覧	
表14 堀立1出土遺物観察表（土製品）	42
表15 堀立2出土遺物観察表（土製品）	
表16 柱穴出土遺物観察表（石製品）	
表17 第V層出土遺物観察表（土製品）	
表18 層位不明出土遺物観察表（土製品）	

写真図版目次

第3章 久米高畠遺跡74次調査

- 図版 1 1. 遺構検出状況（北東より）
図版 2 1. 遺構完掘状況（北東より）
2. 作業風景（北より）
図版 3 1. SD1 完掘状況（北西より）
2. SD3 完掘状況（北東より）
図版 4 1. SK1 検出状況（南東より）
2. SK1 完掘状況（南東より）
図版 5 1. SK2 検出状況（南東より）
2. SK2 完掘状況（南東より）
図版 6 1. 出土遺物（SK1：1～6、SK2：7・9・10、SP5：12、第V層：18・19）

第4章 筋道S遺跡

- 図版 7 1. 調査前風景（北西より）
2. 遺構検出状況①（北より）
図版 8 1. 遺構検出状況②（西より）
2. 遺構検出状況③（北より）
3. 北壁土層（南より）
図版 9 1. 東壁土層（西より）
2. 掘立1 検出状況（南より）
3. 掘立1 柱穴半截状況（南より）
4. 出土遺物（掘立1：1・2）
図版 10 1. 掘立2 検出状況（南東より）
2. 掘立2 柱穴半截状況（南東より）
3. 出土遺物（掘立2：3・4）
4. 掘立2 遺物出土状況（南より）
図版 11 1. SK1 検出状況（北より）
2. SK2 検出状況（北より）
3. SK3 検出状況（南より）
図版 12 1. SP15 遺物出土状況（西より）
2. 出土遺物（SP52：5、第V層：6、層位不明：7・8）
3. 遺構完掘状況（南より）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

松山市は1989（平成元）年度より、国から補助を受けて個人住宅の建設や中小零細開発等に伴う発掘調査（「本発掘調査」という。）及び重要遺跡の保護を目的とした範囲や性格を確認する調査（「重要遺跡確認調査」という。）を実施している。

1990（平成2）年10月に財團法人松山市生涯学習振興財團（現公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團）の設立以降は、必要に応じて財團の調査員を招聘し、これらの調査に従事する形式を採用している。平成17年度からは文化庁の承諾を得たうえで、史跡を除く市内一円を対象とした発掘調査や重要遺跡確認調査、及び試掘調査並びに出土物整理作業や報告書編集業務等について財團と松山市教育委員会文化財課との間で委託契約を結び、財團が業務を実施している。

本書掲載の久米高畠遺跡74次調査は重要遺跡確認調査として実施したものであり、寺城内の調査であるため、事前の試掘・確認調査は行っていない。調査地は久米官衙遺跡群の西部域、遺跡群の主要施設のひとつである回廊状遺構の西側約120mの地点に位置している。調査地近隣には久米高畠遺跡53次調査地や同56次調査地、同58次調査地などがあり、弥生時代前期の土坑や弥生時代後期から古墳時代の堅穴建物、古代の建物跡などが発見されている。調査は公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という。）が主体となり、文化財課の指示のもと、2012（平成24）年11月5日（月）から開始した。調査名は、「久米高畠遺跡74次調査」である。

一方、筋違S遺跡は個人住宅建設に伴い実施した発掘調査である。2018（平成30）年4月12日に渡邊正義氏（以下、「申請者」という。）から松山市福音寺町424番2、424番5、423番6、423番7、424番1の一部及び423番6東側地先（以下、「申請地」という。）における住宅建設に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、「文化財課」という。）に提出された。申請地は松山市埋蔵文化財包蔵地の「No.116 筋違・星岡遺跡群」内にあたり、周辺には福音小学校構内遺跡をはじめ筋違遺跡や乃万の裏遺跡などがあり、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。とりわけ、申請地西隣には筋違N遺跡があり、弥生時代や古墳時代の堅穴建物や掘立柱建物、土坑や該期の遺物が大量に出土している。

これらのことから、埋文センターは申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、事前の試掘調査を実施することになった。試掘調査は2017（平成29）年7月6日（木）に実施し、その結果、溝や柱穴のほかに土師器や須恵器が出土した。そこで、文化財課と申請者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、住宅建設によって失われる遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を行うことになった。発掘調査は国庫補助の適用を受け、埋文センターが主体となり、文化財課の協力のもと2018（平成30）年7月2日（月）より開始した。なお、調査名は「筋違S遺跡」とした。

各調査地の所在地や調査面積、期間等は表1に記す。

表1 調査地一覧

調査名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間
久米高畠遺跡 74次調査	松山市来住町917番、915番2の各一部	約75	2012(平成24)年11月5日 ～同年12月4日
筋違S遺跡	松山市福音寺町424番2・424番5・423番6・423番7・424番1の一部及び423番6東側地先	151.17	2018(平成30)年7月2日 ～同年7月31日

第2節 調査・整理及び編集刊行組織

久米高畠遺跡 74次調査及び筋違S遺跡は、平成24年度と30年度に屋外調査を実施したが、発掘調査に伴う整理作業は屋外調査終了後に実施した。本格的な報告書作成に伴う整理作業は、令和2年度と3年度に実施した。令和2年度は2020(令和2)年4月より、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが報告書作成及び編集業務を行った。業務内容は令和2年度には調査で出土した遺物の接合・復元・実測、及び報告書掲載用の土層図や遺構図面類の作成を行い、翌年、2021(令和3)年3月31日に終了した。2021(令和3)年4月からは遺構図や実測図のデジタルトレンス作業をし、遺物写真撮影後に報告書の編集作業を行った。

(1) 調査組織

[平成24年度]

松山市教育委員会	教育長 山内 泰 (前任、～10/1)	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長 一色 哲昭
	教育長 山本 昭弘 (10/2～)	事務局	局 長 松澤 史夫 次 長 近藤 正
事務局	局 長 鳩 啓吾	施設利用推進部	部 長 玉井 弘幸
	企画官 渡部 満重	埋蔵文化財センター	所 長 田城 武志
	企画官 前田 昌一		調査研究リーダー 栗田 茂敏
文化財課	課 長 駒澤 正憲 主 幹 藤原 昭二		主 任 小笠原 善治 大西 朋子

[平成30年度]

松山市教育委員会	教育長 藤田 仁	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
事務局	局 長 家串 正治	理事長 中山 敏治郎 (前任、～5/29)
	次 長 高田 稔	

次 長	高木 伸治	理事長	本田 元広
次 長	大本 光浩	(5/30 ~)	
文化財課	課 長 沖廣 善久	事務局	局 長 片山 雅央
	主 幹 越智 茂樹		次長兼総務部長 高木 祝二
	主 壱 西村 直人		文化振興部長 小田 克己
		埋蔵文化財センター 所 長 村上 卓也	
			考古館館長 梅木 謙一
			主任 山本 健一
			嘱託 大西 朋子

(2) 整理組織

〔令和2年度〕

松山市教育委員会	教育長 藤田 仁	公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
事務局	局 長 矢野 博朗	理事長 本田 元広
	次 長 重松 一楨	事務局 局 長 片山 雅央
	次 長 西村 秀典	次 長 杉野 公典
文化財課	課 長 渡部 浩典	文化振興部 部 長 片上 俊哉
	副主幹 楠 寛輝	埋蔵文化財センター 所長 古館長 梅木 謙一
	主任 山内 英樹	嘱託 山本 健一
		嘱託 宮内 慎一

(3) 編集・刊行組織

〔令和3年4月1日現在〕

【刊行組織】

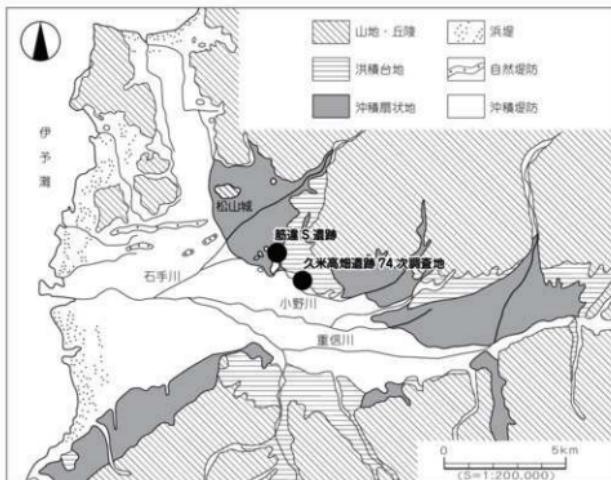
松山市教育委員会	教育長 藤田 仁	公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
事務局	局 長 井出 修敏	理事長 本田 元広
	次 長 西村 秀典	事務局 局 長 片山 雅央
	次 長 横山 憲	次長兼施設管理部部長 杉野 公典
	次 長 横江 茂樹	埋蔵文化財センター 所長 古館長 梅木 謙一
文化財課	課 長 二宮 仁志	嘱託 山本 健一
		嘱託 宮内 慎一
		嘱託 大西 朋子
		(写真担当)

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地

本稿掲載の遺跡が所在する松山市来住地区は、松山平野東部に位置している。地質学的には、高繩山塊に源を発した小河川によって形成された洪積世の段丘と扇状地堆積物上に立地している。具体的には東西3km、南北1.5kmの区域のうち、地区北側を流れる堀越川と南側の小野川とによって挟まれたエリアは河川の浸食による段丘地形を辺縁とする微高地状の地形をなす。来住台地上には、来住庵寺を含む久米官衙遺跡群が展開しており、この中心は堀越川の段丘を背にして、南側を蛇行しながら西流する小野川周辺の低地部を正面とするエリアに立地している。

久米高烟遺跡74次調査地は台地の南西端に立地し、筋達S遺跡は来住地区の北西部に立地している（第1図）。



第1図 松山平野の地形概要図

第2節 歴史的環境

ここでは、調査地が所在する来住台地、及び周辺の遺跡分布を中心に概要を説明する。

旧石器時代

旧石器時代の遺物は来住台地上に限らず、松山平野内では遺構と共に出土した事例は知られていない。全て採集資料であり、単独での出土である。台地上での出土例はないが、台地の東方、鷹子町にある五郎兵衛谷古墳群の調査ではサヌカイト製の角錐状石器が出土し、さらに平井町山田池ではナイフ形石器が採集されている。

縄文時代

台地上では、晩期の資料が報告されている。久米高畠遺跡 36 次調査では晩期後葉の土器群が出土した直径 3.6 m の円形竪穴建物 1 棟が検出されているほか、同 26 次・35 次調査からも同時期の土坑が検出されている。晩期末葉では台地の西方にある南久米片廻り遺跡 2 次調査において朱塗りの壺や刻目凸帯文を施す深鉢などが出土している。

弥生時代

縄文時代には点在していた遺跡も、弥生時代には面的な広がりを見せ、遺跡数も飛躍的に増大する。来住台地上において、前期で注目されるのは、弥生時代前末期から中期初頭の集落である。集落形態は、少数の円形竪穴建物と土坑（貯藏穴）などによって構成される。

前期前半では久米高畠遺跡 69 次調査検出の土坑 SK8 より該期の遺物が出土し、前末期から中期初頭では同 36 次調査から直径 6 m の円形竪穴建物や 30 基余りの土坑が検出されている。また、同 63 次調査では 17 基の土坑、同 66 次調査からは 10 基の土坑が検出されるなど、台地上では数多くの土坑群が確認されている。これらの遺構以外では、久米高畠遺跡 23 次・25 次・28 次・29 次調査から幅 3 m 、深さ 1 m を超える大型溝が検出されており、台地上における環濠を伴う集落の存在が明らかになりつつある。なお、松山市内では岩崎町に所在する岩崎遺跡において同時期の溝や土坑群が報告されている。一方、福音寺地区では筋道 F 遺跡において前末期の土坑が確認されている。

中期では前半の資料は少ないが、中期後半から後期初頭にかけて複数の遺跡が発見されている。来住磨寺 15 次調査では台地縁辺部の落ち際に、凹線文段階の遺物が大量に投棄されており、この中には完形品が多数含まれることから、良好な一括資料として評価されている。福音寺地区では福音小学校構内遺跡より中期後半の土坑が確認されている。

後期の遺構は多くはないが、近年の調査により本稿掲載の久米高畠遺跡 74 次調査地近隣に該期の遺構が検出されている。久米高畠遺跡 58 次調査では後期後半に時期比定される一辺 4.6 m の方形竪穴建物が検出され、同 67 次調査では後期前半の土坑や後期後半の溝が確認されている。また、同 58 次調査や同 63 次調査からは弥生時代終末期の竪穴建物が報告されている。これらのことから、来住台地上では弥生時代を通して継続的に集落が営まれていたことがわかる。一方、福音寺地区では前述した筋道 F 遺跡検出の竪穴建物 SB5 より、一括性の高い後期後半の資料が出土しているほか、福音小学校構内遺跡からは後期の竪穴建物や溝、土器棺墓が発見されている。

古墳時代

前期の資料は稀薄であるが、前述した久米高畠遺跡 58 次調査や同 63 次・67 次調査からは古墳時代初頭の竪穴建物が検出されている。また、同 67 次調査では前期前半の土坑が確認されている。中期から後期では来住台地上にて久米高畠遺跡 10 次・26 次・35 次・60 次・64 次調査などから竪穴建物や掘立柱建物、溝、土坑等が数多く検出されている。とりわけ、同 64 次調査からは一辺 7m を超える後期の大型竪穴建物を検出したことから、7世紀代になり来住台地上に展開する官衙遺跡群や古代寺院成立の基盤となる地方豪族の存在が示唆される。

一方、福音寺地区では中期から後期にかけての竪穴建物や掘立柱建物が検出され、とりわけ、福音小学校構内遺跡からは 100 棟を超える建物群が報告されている。

古墳については、台地内には検出されていない。周辺では前期古墳は確認されておらず、中期から後期の大型古墳が多数点在している。鷹子町に所在する素鷲神社古墳は、直径 30m を超える松山平野でも最大の円墳とされている。また、台地南方、高井町の波賀部神社古墳や台地西方、北久米町の二つ塚古墳など、松山平野では数少ない後期の前方後円墳が分布している。

古 代

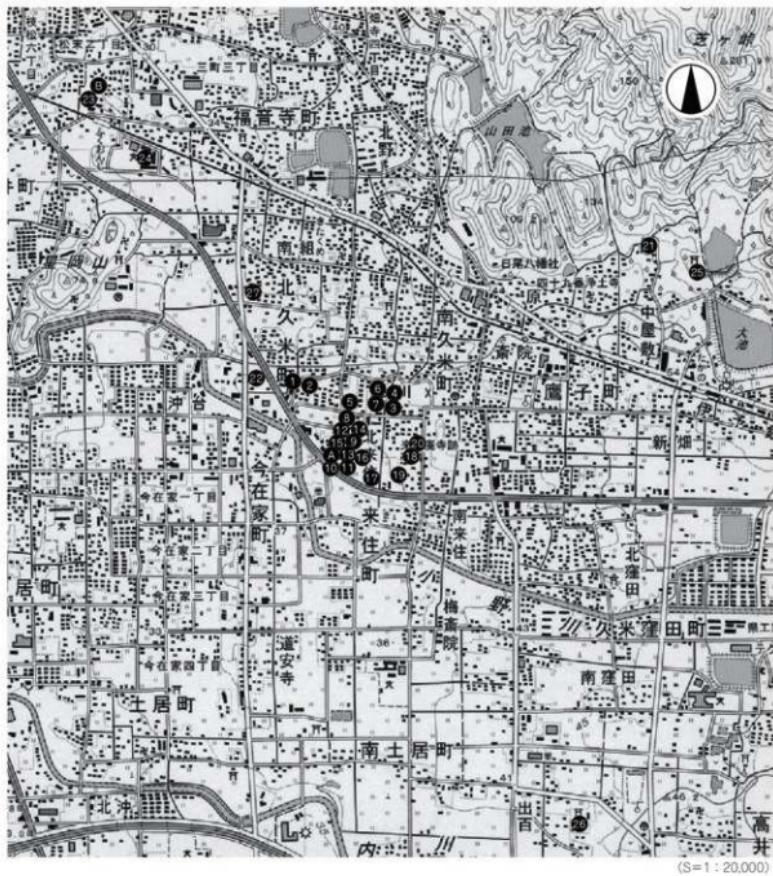
台地上では国指定史跡として知られる来住庵寺をはじめ、官衙関連遺構が多数検出されている。久米官衙遺跡群の調査は白鳳寺院跡とされる来住庵寺の調査が契機となって始まり、寺院隣接部にある回廊状遺構や一方一町規模の区画割りが存在することなどが明らかになった。なお、久米高畠遺跡 7 次調査からは「久米評」線刻須恵器が出土し、同地域が評衛政庁であることが、より確定的となった。久米高畠遺跡 74 次調査地の近隣では、同 53 次調査にて古代瓦が出土した溝のほかに、同 58 次調査では掘立柱建物や溝が検出され、同 67 次調査からは奈良時代の掘立柱建物が確認されている。

中 世

鎌倉時代では、来住庵寺金堂の北東に所在する来住庵寺 21 次・37 次調査から、複数の掘立柱建物が重複して建てられていることが明らかになった。また、金堂の南東に隣接する来住庵寺 24 次調査からも中世後期から末葉頃の屋敷跡の一部が確認されている。久米高畠遺跡 69 次調査からは 13 世紀代の掘立柱建物や溝が検出されている。

近 世

近世では、墓が確認されている。前述した来住庵寺 15 次調査では土壙墓が検出され、17 世紀前半の肥前系陶器が副葬されていた。また、金堂基壇北側には平成 11 年度以前に長隆寺という名称の寺院が営まれていた。長隆寺は江戸時代前期、天和 3 (1683) 年に開山したと伝えられており、発掘調査により土壙跡や本堂基壇跡などが発見されている。なお、来住庵寺金堂基壇から長隆寺境内地までの地域は黄色粘土による造成土が広く堆積しており、粘土層の下には江戸時代末期の遺物を含む土壤が堆積している。これらのことから、来住庵寺金堂基壇周辺は幕末期から明治初期にかけて大規模な土地改変が行われていたことが分かる。



(S=1:20,000)

- | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|
| Ⓐ 久米高焰遺跡 74 次調査 | Ⓑ 茎瀬 S 遺跡 | ① 久米高焰遺跡 7 次調査 | ② 久米高焰遺跡 10 次調査 |
| ③ 久米高焰遺跡 23 次調査 | ④ 久米高焰遺跡 25 次調査 | ⑤ 久米高焰遺跡 26 次調査 | ⑥ 久米高焰遺跡 28 次調査 |
| ⑦ 久米高焰遺跡 29 次調査 | ⑧ 久米高焰遺跡 35 次調査 | ⑨ 久米高焰遺跡 36 次調査 | ⑩ 久米高焰遺跡 53 次調査 |
| ⑪ 久米高焰遺跡 58 次調査 | ⑫ 久米高焰遺跡 60 次調査 | ⑬ 久米高焰遺跡 63 次調査 | ⑭ 久米高焰遺跡 64 次調査 |
| ⑮ 久米高焰遺跡 67 次調査 | ⑯ 久米高焰遺跡 69 次調査 | ⑰ 来住庵寺 15 次調査 | ⑱ 来住庵寺 21 次調査 |
| ⑲ 来住庵寺 24 次調査 | ⑳ 来住庵寺 37 次調査 | ㉑ 五郎兵衛谷古墳 | ㉒ 南久米片瀬リ道路 2 次調査 |
| ㉓ 茎瀬 F 遺跡 | ㉔ 福善小学校構内遺跡 | ㉕ 素羅神社古墳 | ㉖ 波賀御神社古墳 |
| ㉗ 二つ塚古墳 | | | |

第2図 周辺遺跡分布図

【参考文献】

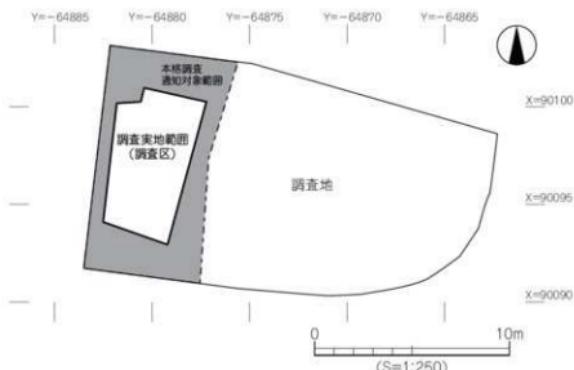
- 森 光晴 1978 「五郎兵衛谷古墳」松山市文化財調査報告書 第13集
松山市教育委員会 1987 「松山市史料集 第2巻 考古編」
- 橋本 雄一 2013 「久米高畠遺跡36次調査」松山市文化財調査報告書 第166集
小玉 亜紀子 2008 「久米高畠遺跡-26次調査-」松山市文化財調査報告書 第127集
河野 史知 2004 「久米高畠遺跡35次調査」「来住・久米地区の遺跡V」松山市文化財調査報告書
第101集
梅木 謙一 1996 「南久米片廻り遺跡2次調査地」「小野川流域の遺跡」松山市文化財調査報告書
第57集
小笠原 善治 2012 「久米高畠遺跡-69次・71次・73次調査-」松山市文化財調査報告書
第159集
橋本 雄一 2005 「久米高畠遺跡63次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報17
橋本 雄一 1995 「久米高畠遺跡23次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報VII
高尾 和長 2003 「久米高畠遺跡-25次調査-」松山市文化財調査報告書 第93集
橋本 雄一 1997 「久米高畠遺跡28次・29次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報IX
宮内 慎一 1999 「岩崎遺跡」松山市文化財調査報告書 第71集
梅木 謙一 1996 「筋道F遺跡」「福音寺地区の遺跡」松山市文化財調査報告書 第52集
西尾 幸則 1993 「来住庵寺第15次調査」松山市文化財調査報告書 第34集
宮内 慎一 2016 「久米高畠遺跡58次・60次・61次調査」松山市文化財調査報告書 第182集
橋本 雄一 2009 「久米高畠遺跡67次・68次調査」松山市文化財調査報告書 第132集
梅木 謙一 1995 「福音小学校構内遺跡-弥生時代編-」松山市文化財調査報告書 第50集
河野 史知 2004 「久米高畠遺跡10次」「来住・久米地区の遺跡V」松山市文化財調査報告書
第101集
橋本 雄一 2005 「久米高畠遺跡64次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報17
武正 良浩 2003 「福音小学校構内遺跡II-古墳時代以降編-」松山市文化財調査報告書
第91集
松山市教育委員会 1982 「波賀部神社古墳」「古代の松山平野 先土器時代～平安時代」
高尾 和長 2007 「北久米遺跡4次調査地(二つ塚古墳)」松山市埋蔵文化財調査年報19
山之内 志郎 2007 「北久米遺跡6次調査地(二つ塚古墳)」松山市埋蔵文化財調査年報19
橋本 雄一 2009 「久米高畠遺跡1次・7次調査」松山市文化財調査報告書 第136集
小笠原 彰 2003 「久米高畠遺跡53次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報14
水本 完児 1993 「来住庵寺21次調査地」松山市埋蔵文化財調査年報V
相原 浩二 2010 「来住庵寺37次調査」松山市埋蔵文化財調査年報22
橋本 雄一 2010 「来住庵寺24次調査」「史跡久米官衙遺跡群調査報告書4」松山市文化財調査
報告書 第142集

第3章 久米高畠遺跡74次調査

第1節 調査の経緯

2012（平成24）年11月5日より、屋外調査を開始した。調査地は東西に長い形状をなし、調査対象範囲は調査地の西部分約1/3である（第3図）。現地では建物建築に伴い北部に建築業者用の仮設トイレが既に設置されており、南部は建築用資材の搬入路として使用するため、調査区南部分は15～25m程度控えて調査区を設定した。また、表土掘削による廃土は調査区が狭小なため、所有者との事前協議の結果、所有者側が場外に搬出することになった。以下、調査工程を略記する。

11月5日（月）調査員1名と作業員5名により、本格的な発掘調査を開始する。発掘用具や機材を搬入後、安全対策用のガードフェンスや杭を設置する。その後、重機を使用して表土の掘削を行い、廃土は場外へ搬出する。11月6日（火）本日より、調査壁面の精査と遺構検出作業を開始する。11月8日（木）セントラルエンジニアリング株式会社により4級基準点の打設が行われ、基準点をもとにグリッドの設定を行う。11月9日（金）全面精査後、遺構検出状況写真を撮影する。11月12日（月）平板測量により調査区の測量を行い、併行して調査壁面の土層図を作成する。11月13日（火）本日より、遺構の掘削を開始する。まず、柱穴の半截作業と断面観察、及び土坑の先行トレンチを掘削する。11月16日（金）溝の掘削と断面図を作成する。11月19日（月）遺構平面図の作成と断面観察、及び遺構断面図を作成する。11月22日（木）遺構内から出土した遺物の取り上げをし、遺構の掘り下げを続行する。11月28日（水）検出した全ての遺構を完掘し、全面精査を行う。11月29日（木）遺構完掘写真を撮影し、土層確認用の深掘トレンチを掘削する。12月4日（火）発掘用具や機材を搬出し、屋外調査を終了する。



第3図 調査地測量図

調査名：久米高畠遺跡74次調査

調査場所：松山市来住町917番、915番2の各一部

調査面積：約75m²

調査期間：2012（平成24）年11月5日（月）～同年12月4日（火）

調査担当：公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター 小笠原 善治

第2節 層位（第5図）

調査地は、調査以前は雑種地であった。現況の標高は、36.2m前後である。調査で確認した土層は、以下の6層である。

第I層：近現代の造成にかかる客土で、地表下20～56cmまで開発が行われている。

第II層：旧耕作土〔緑灰色土（5G 5/1）〕で調査区全域にみられ、層厚は4～16cmである。

第III層：褐色土（7.5YR 4/1）に、にぶい褐色土（7.5YR 6/3）や黄橙色土（10YR 8/8）がブロック状に混入するもので、調査区内に部分的にみられ、層厚は2～16cmである。

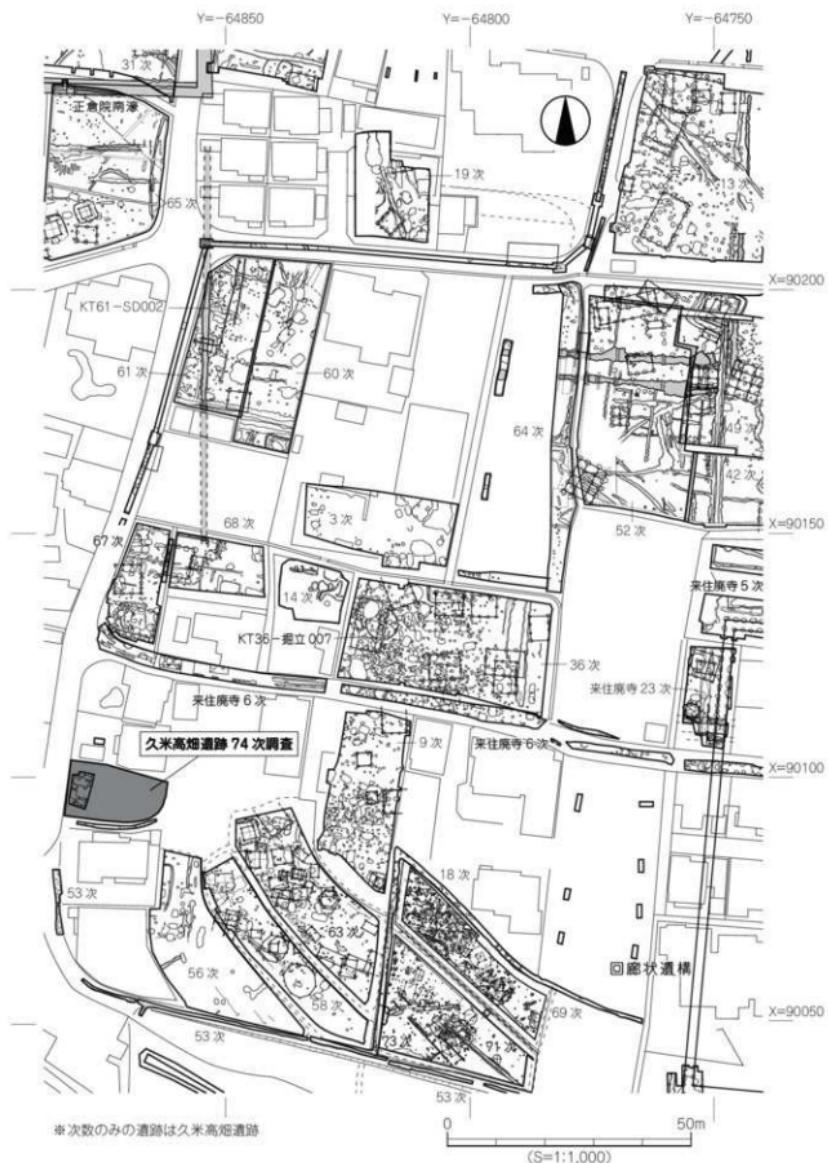
第IV層：にぶい褐色土（7.5YR 6/3）で調査区内に部分的にみられ、層厚は2～10cmである。本層中からは土師器や須恵器の小片が数点出土した。

第V層：黒褐色土（7.5YR 2/2）で調査区内にて部分的にみられ、層厚は2～10cmである。本層中からは弥生土器片が少量出土した。

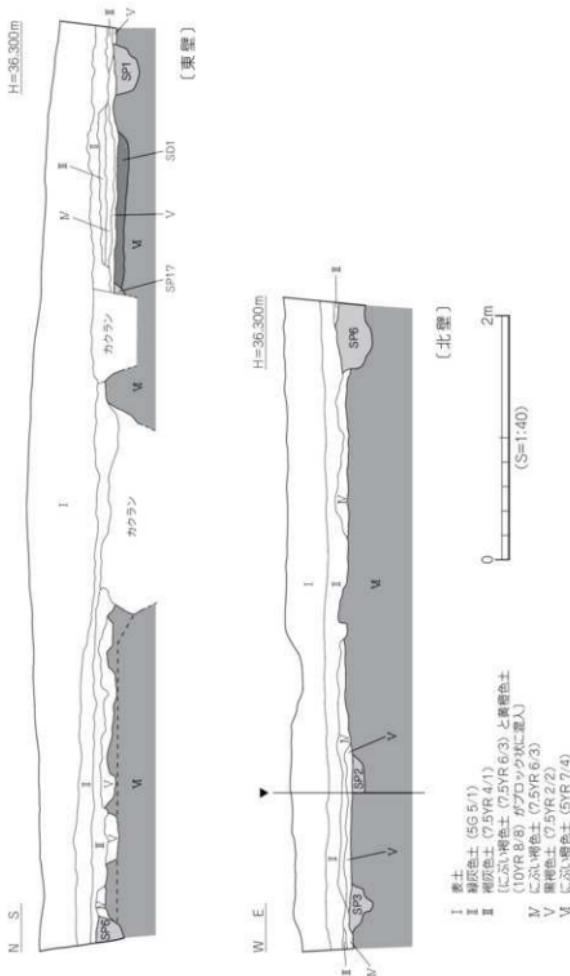
第VI層：にぶい橙色土（5YR 7/4）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。調査では、溝や土坑、柱穴を検出した。

検出層位や出土遺物より、第V層は弥生時代、第IV層は古墳時代までに堆積した土層と推測される。なお、調査にあたり調査地内を2m四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へA・B・C・D、北から南へ1・2・3・4・5とし、A1・A2・……D5区といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

層位

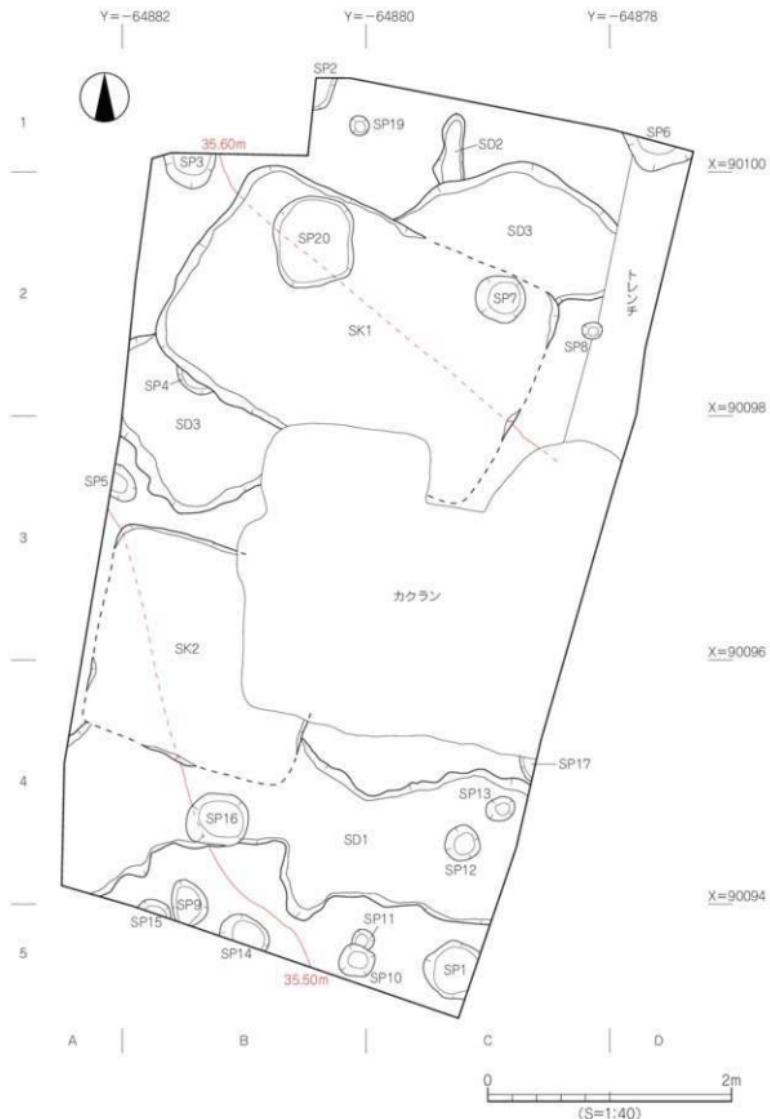


第4図 久米高畠遺跡 74次調査周辺遺跡分布図



第5図 東壁・北壁土層図

層位



第6図 造構配置図

第3節 遺構と遺物

調査では、弥生時代から古墳時代までの遺構・遺物を検出した。検出した遺構は溝3条、土坑2基、柱穴19基である。遺物は弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳時代）、須恵器（古墳時代）、陶磁器（近現代）、石器が出土した。なお、遺物の出土量は遺物収納箱（44×60×14cm）2箱分である。ここでは、検出した遺構別に説明する。

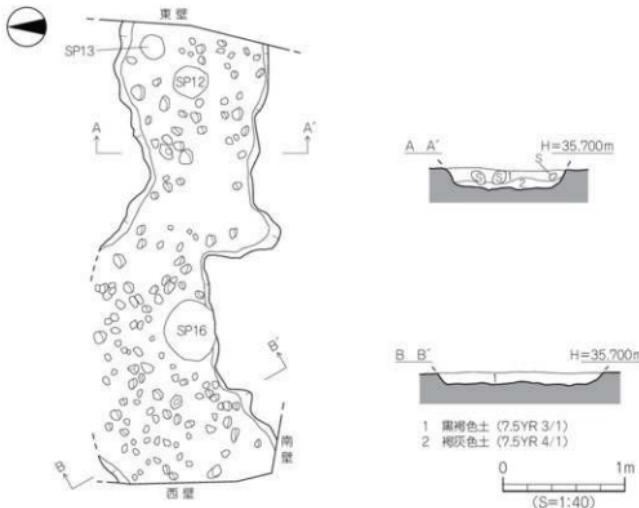
1. 溝

調査では、3条の溝を確認した。すべて、第VI層上面での検出である。

SD1（第7図、図版3）

調査区南部 A4～C5 区で検出した東西方向に延びるやや蛇行した溝で、溝両端は調査区外に続く。溝西側は土坑SK2と重複し、SD1が後出す。調査壁の土層観察により、SD1上面は第V層が覆う。なお、基底面からは3基の柱穴（SP12・13・16）を検出したが、各柱穴掘り方埋土は全てSD1と異なっており、SD1構築以前の遺構と考えられる。溝の規模は検出長3.74m、幅0.78～1.26m、深さは10～16cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は上層が黒褐色土（7.5YR 3/1）、下層は褐灰色土（7.5YR 4/1）である。溝基底面には凹凸がみられ、壁面や基底面には径1～10cm大の礫が検出された。溝からは大量の礫（径2～15cm）が検出されたが、土器や石器の出土はみられなかった。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、後述する土坑SK2（弥生時代後期後半）より後出すことや検出層位などから、概ね弥生時代後期後半以降の溝とする。

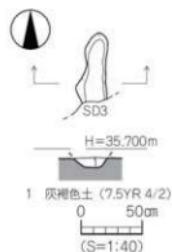


第7図 SD1 測量図

SD2 (第8図)

調査区北部C1・2区で検出した南北方向の短い溝で、溝北端は消失し、南端はSD3と重複するが前後関係は不明である。溝の規模は検出長0.58m、幅0.14～0.23m、深さは6cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰褐色土(7.5YR 4/2)単層である。溝基底面には凹凸がなく、ほぼ平坦である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であり、時期不明とする。

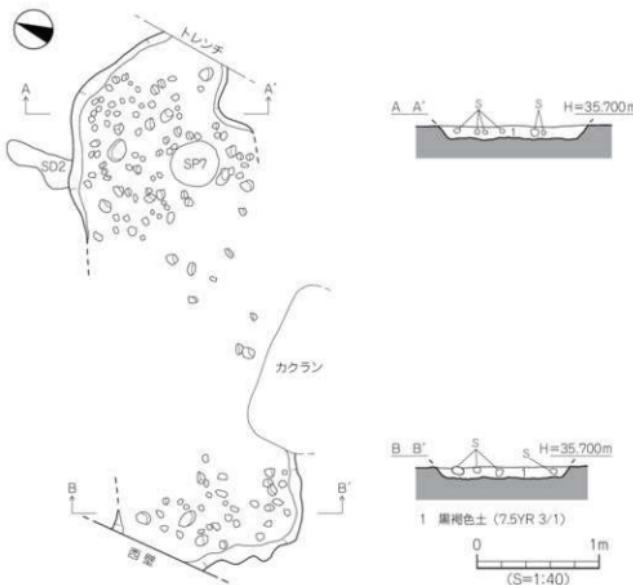


第8図 SD2 測量図

SD3 (第9図、図版3)

調査区北部B3～D2区で検出した東西方向に延びる蛇行した溝で、溝両端は調査区外へ続く。溝西側は後述する土坑SK1(弥生時代中期後半)と重複し、SD3が後出する。溝の規模は検出長4.38m、幅0.60～1.58m、深さは8cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土(7.5YR 3/1)単層である。溝基底面には凹凸があり、東から西へ向けて緩やかな傾斜をなす(比高差3cm)。溝からは、大量の礫(径1～18cm)が検出されたが、土器や石器の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SK1に後出することから、概ね弥生時代中期後半以降の溝とする。



第9図 SD3 測量図

2. 土 坑

調査では、2基の土坑を検出した。両者共に、第VI層上面での検出である。

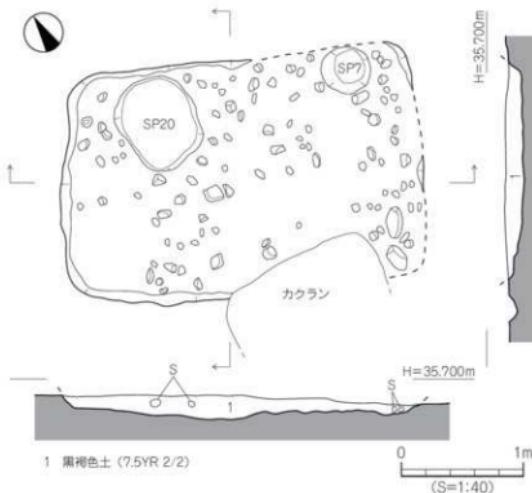
SK1 (第10図、図版4)

調査区北東部B1～C3区で検出した土坑で、土坑南西隅は擾乱により削平され消失している。また、土坑南半部は溝SD3と重複し、SK1が先行する。遺構検出時には土坑東側の様相が不明であり、平面形態の認定が困難であったが、土坑南東隅と思われる部分を検出したことにより、形態や規模の想定が可能となった。平面形態は長方形をなすものと思われ、規模は南北検出長1.78m、東西検出長2.58m、深さは最深部で16cmを測る。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土(7.5YR 2/2)単層である。土坑基底面には凹凸がみられ、土坑壁面や基底面は径1～15cmの大いな小礫が露出する状況であった。なお、土坑基底面にて2基の柱穴(SP7・20)を検出した。埋土はSP7は黒褐色土(7.5YR 3/1)に、にぶい橙色土(5YR 7/4)がブロック状に混入、SP20は黒褐色土(7.5YR 2/2)である。土坑内からは、大量の礫と弥生土器片や石器が少量出土した。

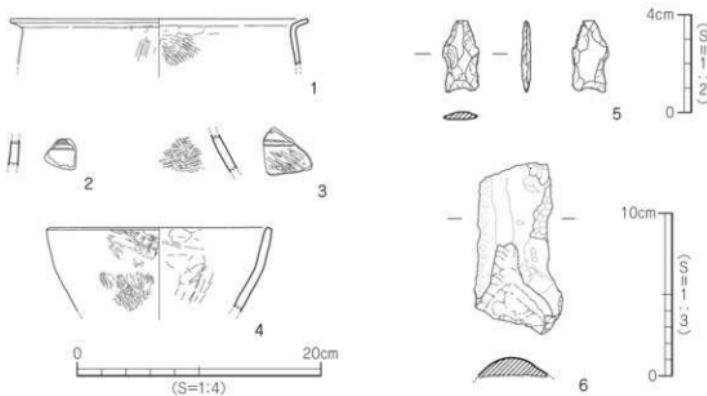
出土遺物 (第11図、図版6)

1・2は壺形土器。1は折曲口縁で、胴部には内外面共にヘラミガキ調整がみられる。2は胴部小片で、外面にはクシ状工具による沈線文2条以上を施す。3は壺形土器。肩部の小片で、クシ状工具による沈線文2条を施す。4は鉢形土器。直口口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。体部内外面には、タテ方向のヘラミガキ調整がみられる。5は四基無茎石鎌。サスカイト製で、刃部を欠損するものの、ほぼ完形品である。6は剝片で、石材は安山岩である。

時期：出土した遺物には時期差が認められるが、1・2の特徴より、SK1は弥生時代中期後半の土坑と考えられる。



第10図 SK1 測量図



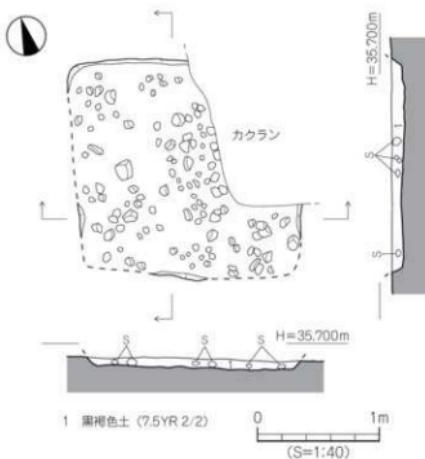
第 11 図 SK1 出土遺物実測図

SK2 (第 12 図、図版 5)

調査区中央部南西寄り A3 ~ B4 区で検出した土坑で、土坑北東部は後世の擾乱により削平されている。また、土坑南半部は溝 SD1 と重複し、SK2 が先行する。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北検出長 1.78m、東西検出長 1.90m、深さは最深部で 7cm を測る。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 2/2) 単層である。土坑基底面には凹凸が多く、土坑壁体及び基底面は小砾が露出する状況であった。遺物は大量の礫が検出されたほか、弥生土器片や石器が少量出土した。

出土遺物 (第 13 図、図版 6)

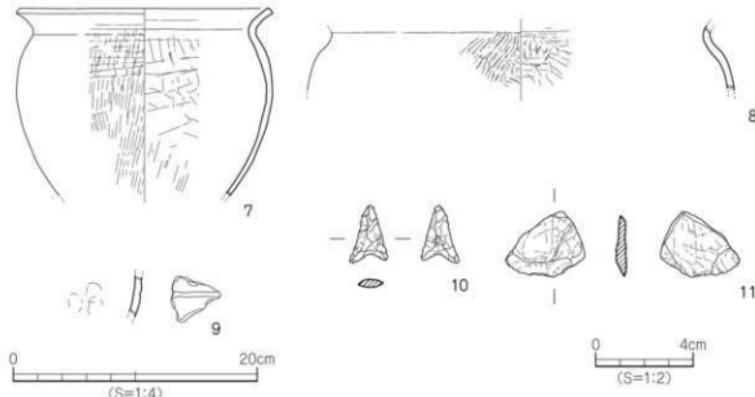
7・8 は甕形土器。7 は「く」の字状口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。8 は胴部片で、外面にはヘラミガキ調整がみられる。9 は壺



第 12 図 SK2 測量図

形土器。胴部の小片で、ヘラ状工具による沈線文 1 条を施す。10 は凹基無茎石鏃で、ほぼ完形品である。サヌカイト製。11 はスクレイパーで、石材は結晶片岩である。

時期：出土遺物（8・9）の特徴より、SK2 は弥生時代後期後半の土坑と考えられる。



第 13 図 SK2 出土遺物実測図

3. 柱穴 (第 14・15 図)

調査では、19 基の柱穴 (SP1 ~ 20) を検出した (SP18 は欠番)。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の 6 種類 (埋土①~⑥) に分けられる。

埋土①：黒褐色土 (7.5YR 3/1)

埋土②：黒褐色土 (7.5YR 2/2)

埋土③：黒褐色土 (7.5YR 3/1) に、にぶい橙色土 (5YR 7/4) がブロック状に混入

埋土④：黒色土 (7.5YR 2/1)

埋土⑤：極暗褐色土 (7.5YR 2/3)

埋土⑥：灰褐色土 (7.5YR 6/2)

各埋土の柱穴は、埋土①：4 基 (SP1・3・5・6)、埋土②：7 基 (SP9・14・15・16・17・19・20)、埋土③：5 基 (SP2・7・8・10・11)、埋土④：1 基 (SP13)、埋土⑤：1 基 (SP12)、埋土⑥：1 基 (SP4) となる。遺物は 7 基の柱穴 (SP1・2・5・9・14・16・20) から、弥生土器片が数点出土した。ここでは、3 基の柱穴から出土した遺物を掲載する。

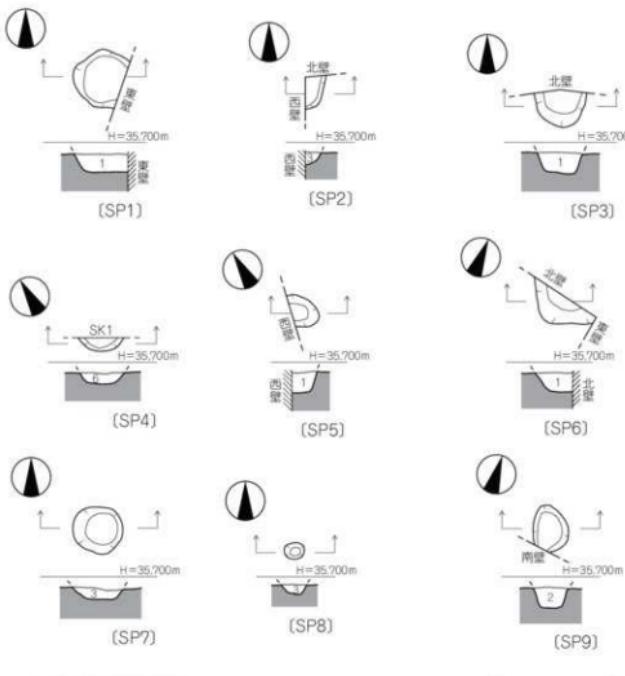
柱穴出土遺物（第 16 図、図版 6）

12 は SP5 出土品。広口壺の口縁部で、口縁端面にヘラ状工具による沈線文 1 条、口縁下端面には刻目を施す。弥生時代前半。13 は SP20 出土品で、壺形土器の肩部片である。弥生時代中期。14 は SP1 出土品。壺形土器の底部片で、外面にはヘラミガキ調整がみられる。弥生時代中期後半。

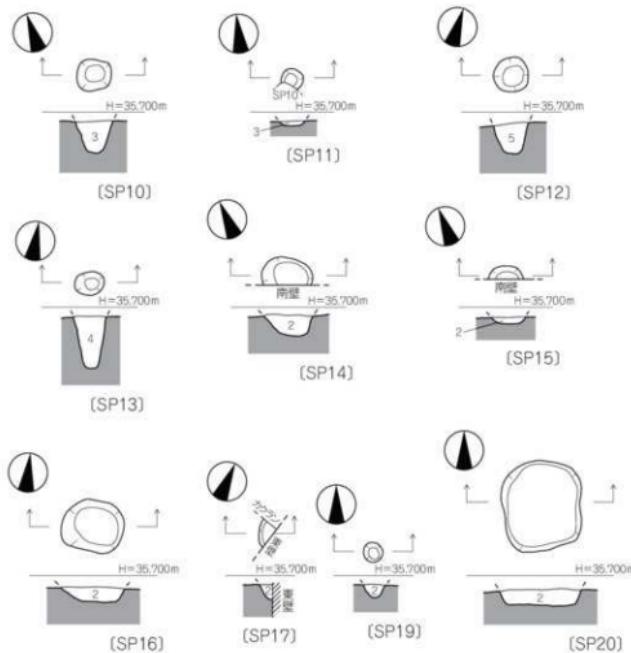
4. 包含層出土遺物（第 17 図、図版 6）

調査では、第Ⅳ層及び第Ⅴ層中から少量ではあるが遺物が出土した。

15 は第Ⅳ層出土品。須恵器坏蓋の小片で、色調は内外面共に灰色である。古墳時代後期。16～19 は第Ⅴ層出土品。16 は鉢形土器の口縁部片で、径 0.4cm 大の孔が看守される。弥生時代後期。17 は壺形土器の胴部小片で、外面にはタタキ調整がみられる。弥生時代後期後半。18 は壺形土器の胴部片で、外面にはヘラ状工具によるヨコ方向の沈線文 1 条と、タテ方向の沈線文 2 条がみられる。外面にはナ



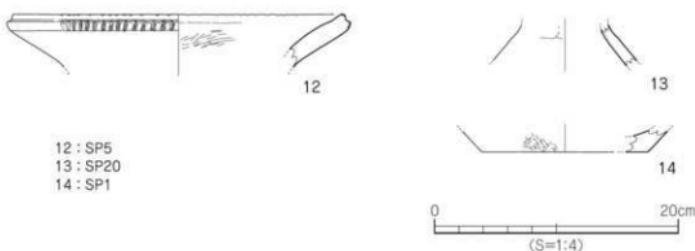
第 14 図 柱穴測量図 (1)



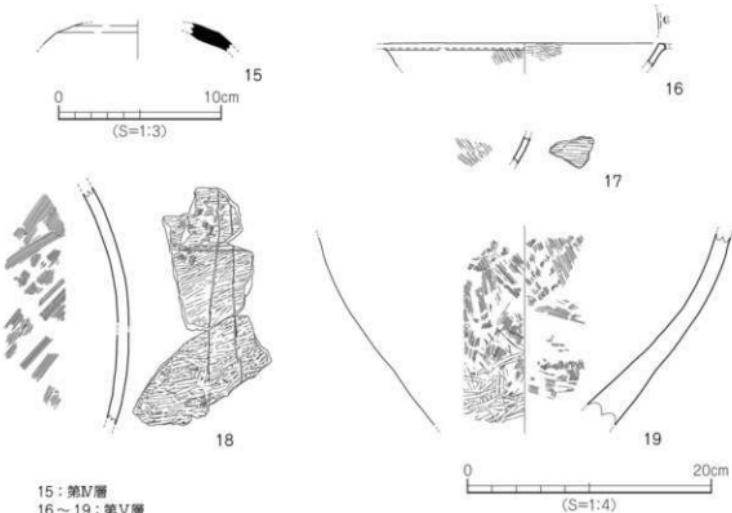
- 2 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
 3 黒褐色土 (7.5YR 3/1) に、にぶい橙色土
 (5YR 7/4) がブロック状に混入
 4 黒色土 (7.5YR 2/1)
 5 線面褐色土 (7.5YR 2/3)

0 1m
(S=1:40)

第 15 図 柱穴測量図 (2)



第 16 図 柱穴出土遺物実測図



第17図 包含層出土遺物実測図

ナメ方向の丁寧なヘラミガキ調整があり、内面は細かなハケメ調整がみられる。弥生時代前半。19は壺形土器の胴部片で、器壁は厚く、外面にはハケメ調整後、ヘラミガキを加える。弥生時代中期後半。

第4節 小 結

調査では、弥生時代から古墳時代までの遺構・遺物を確認した。検出した遺構は溝3条、土坑2基、柱穴19基である。調査区内には後世の攪乱が全体の1/5程度を占め、調査区中央部付近は攪乱により削平されている。検出した遺構には出土遺物がなく、時期特定できないものもあるが、概ね弥生時代の遺構と考えられる。なお、溝や土坑は遺存状態が良好でなく、検出面と基底面との比高差はわずかである。とりわけ、土坑は遺存状態が悪く、平面プランの検出は困難であった。

その中で、SK1は調査区北半部で検出した長方形状の土坑(1.8×2.6m以上)で、土坑内からは大量の河原石(径1~15cm)のほかに弥生土器片や石器が出土した。遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね弥生時代中期後半の土坑と考えられる。調査地周辺では、調査地東側に位置する来住庵寺15次調査において、該期の遺物が大量に投棄された状態で検出されている。また、SK2は一辺約1.8~1.9mの方形土坑で、土坑内からは弥生時代後半に時期比定される土器片が出土した。調査地北側に所在する久米高畠遺跡67次調査では、同時期の土坑が検出されている。このように、SK1・

2の検出は来往台地上における弥生時代前期や後期集落の広がりを知るうえで好資料となるものである。

土坑以外には、3条の溝が検出されている。このうち、SD1とSD3は幅0.6~1.6m、深さ8~16cmを測る東西方向に蛇行する溝で、溝からは土坑と同様、大量の河原石が検出されている。両者共に、時期特定しうる遺物の出土はないが、土坑との重複関係より、SD1は弥生時代後期後半以降、SD3は弥生時代中期後半以降に掘削された溝と推測される。なお、溝の性格や用途は定かではないが、形状や基底面の状況等から自然流路の可能性をもつ遺構である。

既往の調査成果では、本調査地近隣が官衙関連施設の展開する南限・南西限と評価されている。今回の調査では官衙に関連する遺構・遺物は検出されておらず、これまでの調査成果を追認する結果となつた。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄 グリッド名を記載。

規模欄 () は現存値を示す。

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 弥→弥生土器、石→石製品

(2) 遺物観察表

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、体→体部、胴→胴部

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~2) → 「1~2mmの大石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→ 良好

表2 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A4 ~ C5	東西	レンズ状	374 × 0.78 ~ 1.26 × 0.10 ~ 0.16	黒褐色土 褐灰色土		弥生後期後半以降	SK2 と重複
2	C1 ~ 2	南北	レンズ状	0.58 × 0.14 ~ 0.23 × 0.06	灰褐色土		不明	SD3 と重複
3	B3 ~ D2	東西	レンズ状	4.38 × 0.60 ~ 1.58 × 0.08	黒褐色土		弥生中期後半以降	SK1 と重複

表3 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B1 ~ C3	長方形	逆台形状	(2.58) × (1.78) × 0.16	黒褐色土	弥・石	弥生中期後半	SD3 と重複
2	A3 ~ B4	(方形)	逆台形状	(1.90) × (1.78) × 0.07	黒褐色土	弥・石	弥生後期後半	SD1 と重複

表4 柱穴一覧

柱穴 (S.P.)	地区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
1	C5	円形	0.54 × (0.40) × 0.13	黒褐色土	弥	
2	B1	(円形)	(0.29) × (0.14) × 0.10	黒褐色土 (にぶい橙色土混入)	弥	
3	B1・2	(円形)	0.40 × (0.28) × 0.15	黒褐色土		
4	B2	(円形)	(0.30) × (0.08) × 0.07	灰褐色土		SD3・SK1と重複
5	A・B3	(楕円形)	(0.20) × 0.28 × 0.15	黒褐色土	弥	
6	D1	(円形)	(0.56) × (0.24) × 0.13	黒褐色土		
7	C2	円形	0.38 × 0.36 × 0.08	黒褐色土 (にぶい橙色土混入)		SK1と重複
8	C2	円形	0.14 × 0.13 × 0.04	黒褐色土 (にぶい橙色土混入)		
9	B4・5	楕円形	(0.36) × 0.26 × 0.14	黒褐色土	弥	
10	B・C5	円形	0.26 × 0.24 × 0.14	黒褐色土 (にぶい橙色土混入)		SP11と重複
11	B・C5	円形	0.18 × 0.18 × 0.03	黒褐色土 (にぶい橙色土混入)		SP10と重複
12	C4	円形	0.27 × 0.24 × 0.23	無暗褐色土		SD1と重複
13	C4	楕円形	0.24 × 0.17 × 0.41	黑色土		SD1と重複
14	B5	(楕円形)	0.40 × (0.21) × 0.17	黒褐色土	弥	
15	B4・5	(円形)	(0.24) × (0.10) × 0.05	黒褐色土		
16	B4	楕円形	0.50 × 0.40 × 0.10	黒褐色土	弥	SD1と重複
17	C4	(楕円形)	(0.20) × (0.16) × 0.10	黒褐色土		
18				火 管		
19	B・C1	円形	0.17 × 0.17 × 0.09	黒褐色土		
20	B2	楕円形	0.74 × 0.60 × 0.11	黒褐色土	弥	SK1と重複

表5 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 細・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	団版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (24.2) 残高 3.7	折曲口縁。小片。	◎マ・ミツ 側ヘラミガキ	◎ヨコナデ 側ヘラミガキ	褐色 灰黄色	石・長 (1~3) ○		6
2	甕	残高 2.1	クシ彫き沈線文2条以上あり。小片。	ヨコナデ	ナデ	褐色 灰黄色	石・長 (1~2) ○		6
3	甕	残高 3.0	クシ彫き沈線文2条あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄色 暗灰色	石・長 (1~2) ○		6
4	鉢	口径 (17.8) 残高 6.8	直口口縁。口縁端部は「コ」字状に 仕上げる。	◎ヨコナデ 側ヘラミガキ	◎ヨコナデ 側ヘラミガキ	褐灰色 灰黄色	石・長 (1~2) ○		6

表 6 SK1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
5	石顎	ほぼ完形	サスカイト	(29)	15	0.3	1.50	凹基無茎石顎
6	剝片	1/2	安山岩	(10.4)	(5.4)	(1.1)	74.78	

表 7 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径 (20.2) 残高 15.3	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。	口コナデ ■工具による ナデ	口コナデ ■工具による ナデ	灰褐色 灰黄色	石・長 (1~3) 金 ○	黒斑	6
8	甕	残高 5.2	小片。	ヘラミガキ →ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) 金 ○		
9	甕	残高 3.7	ヘラ描き沈綴文 1 条あり。小片。	マメツ	マメツ	褐色 灰黄色	石・長 (1~2) 金 ○		6

表 8 SK2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
10	石顎	ほぼ完形	サスカイト	(2.3)	16	0.4	0.89	凹基無茎石顎
11	スクレイパー	完形	結晶片岩	26	32	0.4	3.61	

表 9 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	甕	口径 (27.0) 残高 4.3	広口甕。口縁上面にヘラ描き沈綴文 1 条、口縁下端面に削目あり。	マメツ	ヘラミガキ →ナデ	褐色 黒色	石・長 (1~4) 金 ○	SP5 黒斑	6
13	甕	残高 3.2	肩部小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ○	SP20	
14	甕	底径 (13.5) 残高 1.8	平底。小片。	ヘラミガキ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ○	SP1	

表 10 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	坏蓋	残高 1.2	小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	苦 ○	第V層	
16	鉢	口径 (22.2) 残高 1.9	外反口縁。口縁部に径 0.4cm 大の孔あり。 小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1) ○	第V層	
17	甕	残高 2.6	小片。	タタキ	ハケ (6 本/cm)	灰黄色 灰黄色	石 (1) ○	第V層	
18	甕	残高 19.4	ヘラ描き沈綴文 1 条 + タテ沈綴文 2 条あり。	ヘラミガキ	ハケ (12~14 本/cm)	灰褐色 灰黄色	石・長 (1~3) 金 ○	第V層	6
19	甕	残高 15.1	胴部片。壁面は厚い。	ハケ (4 本/cm) →ヘラミガキ	ハケ (4 本/cm)	暗褐色 灰黄色	石・長 (1~3) ○	第V層	6

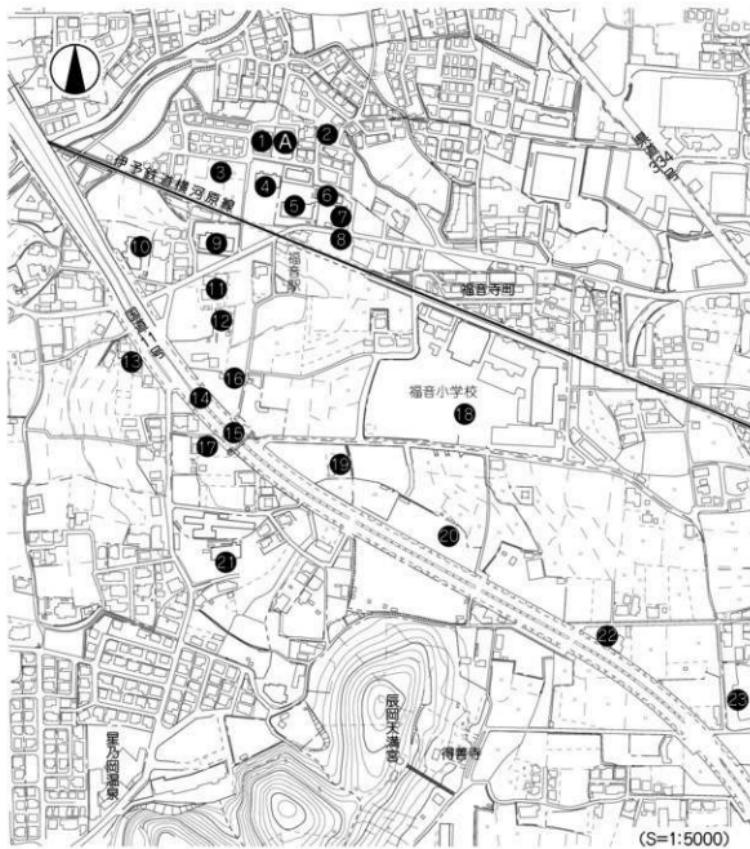
第4章 筋違S遺跡

第1節 調査の経緯

調査地は、松山平野の東部を流れる川附川下流域の左岸、国道11号線星岡交差点から北東方向へ240mの地点で標高29.20mに立地する。調査は、弥生時代から古墳時代の集落範囲や構造の確認を主目的とし、建設工事により地下の遺構に影響を及ぼす部分のみを行った。

調査は、平成30年7月2日（月）より開始した。以下、調査工程を略記する。

- 7月2日（月）：本日より、屋外調査を開始する。調査地内の雑草除去及び掘削範囲の設定、安全保護フェンス設置を行う。
- 7月4日（水）：重機により表土の除去を行い、遺構検出作業に入る。
- 7月9日（月）：調査区全体の養生、排水、境界保全のための作業を行う。
- 7月10日（火）：基準点測量及び基準杭打設、遺構検出作業を行う。
- 7月11日（水）：遺構検出作業、調査区壁面土層の測量を行う。
- 7月12日（木）：遺構検出状況及び調査区壁面土層の写真撮影を行う。その後、各遺構の掘り下げ、壁面土層の測量に入る。
- 7月13日（金）：遺構の掘り下げを行う。遺構完掘後、平面測量に入る。壁面土層の測量を随時行う。
- 7月17日（火）：遺構の掘り下げ、測量を行う。遺構より出土した遺物の写真撮影を行う。その後、測量し採り上げを行う。
- 7月18日（水）：掘立柱建物の柱穴を掘り下げ、堆積状況の写真撮影及び測量を行う。
- 7月19日（木）：柱穴を掘り下げ、堆積状況の写真撮影及び測量を行う。終了後、完掘に移行する。地山面においての海拔等高線図（センター図）の測量に入る。
- 7月20日（金）：すべての遺構の完掘を終了する。主たる柱穴の完掘状況写真撮影を完了後、測量を行う。前日から行っていた地山面においての海拔等高線図（センター図）の測量を続行する。写真撮影の為に、調査区全体の精査、清掃を行う。
- 7月23日（月）：高所作業車を用いて、調査区完掘状況の写真撮影を行う。その後、各遺構の精査、測量図の確認をし、補足作業に入る。
- 7月24日（火）：測量図の確認、補足作業を続行する。掘削用具の片づけ、出土遺物の洗浄作業を行う。
- 7月25日（水）：測量図の確認、補足作業を続行する。
- 7月26日（木）：重機による調査区埋め戻しを行い完了する。
- 7月27日（金）：埋め戻しに用いた重機を搬出する。調査地安全対策用フェンスの撤去、掘削用具の運搬を行う。
- 7月30日（月）：発掘機材の運搬、プレハブ等リース品の返却をする。
- 7月31日（火）：出土遺物の洗浄作業を行う。現地にて松山市教育委員会文化財課担当者と共に最終確認をし、調査地の引き渡しを完了する。



A 筋達 S 遺跡

- | | | | | |
|-------------------|-----------|-------------|------------------|-----------|
| ① 筋達 N 遺跡 | ② 筋達 K 遺跡 | ③ 筋達 L 遺跡 | ④ 筋達 F 遺跡 | ⑤ 筋達 H 遺跡 |
| ⑥ 筋達 I 遺跡 | ⑦ 筋達 O 遺跡 | ⑧ 筋達 P 遺跡 | ⑨ 筋達 E 遺跡 | ⑩ 筋達 J 遺跡 |
| ⑪ 筋達 M 遺跡 | ⑫ 筋達 G 遺跡 | ⑬ 筋達 Q 遺跡 | ⑭ 筋達 B 遺跡 | ⑮ 筋達 A 遺跡 |
| ⑯ 筋達 C 遺跡 | ⑰ 筋達 D 遺跡 | ⑱ 福音小学校構内遺跡 | ⑲ 乃万の裏遺跡 2 次調査 | |
| ⑳ 乃万の裏遺跡
3 次調査 | ㉑ 星岡登立遺跡 | ㉒ 北久米常癡遺跡 | ㉓ 北久米淨蓮寺遺跡 3 次調査 | |

第 18 図 周辺遺跡分布図

第2節 層位 (第19図、図版8・9)

調査地は、調査以前は駐車場であった。現況の標高は29.20m前後である。調査で確認した土層は以下の6層である。

第I層：造成土。調査区全域にあり、層厚2～26cmを測る。

第II層：近現代の農耕に伴う耕土である。褐灰色土(10YR 6/1)で、調査地のはば全域で検出され、層厚2～24cmを測る。

第III層：水分の影響により橙色を帯びており、水田底土と考えられる。黄橙色粘質土(10YR 8/6)で、調査区北東部で検出され、層厚4～14cmを測る。

第IV層：灰黄褐色土(10YR 5/2)で、調査区北部中央で検出され、層厚4～22cmを測る。埋土の色や礫石等を含まないことや、水平堆積であることから、耕作土と考えられる。

第V層：暗褐色混土(10YR 3/4)で、土器片を含有している。調査区北東部の海拔28.80mより低い位置で検出され、層厚4～22cmを測る。弥生土器、土師器、あまり磨滅を受けていない須恵器片や礫石が混入することなどから、凹地を埋める造成土と考えられる。

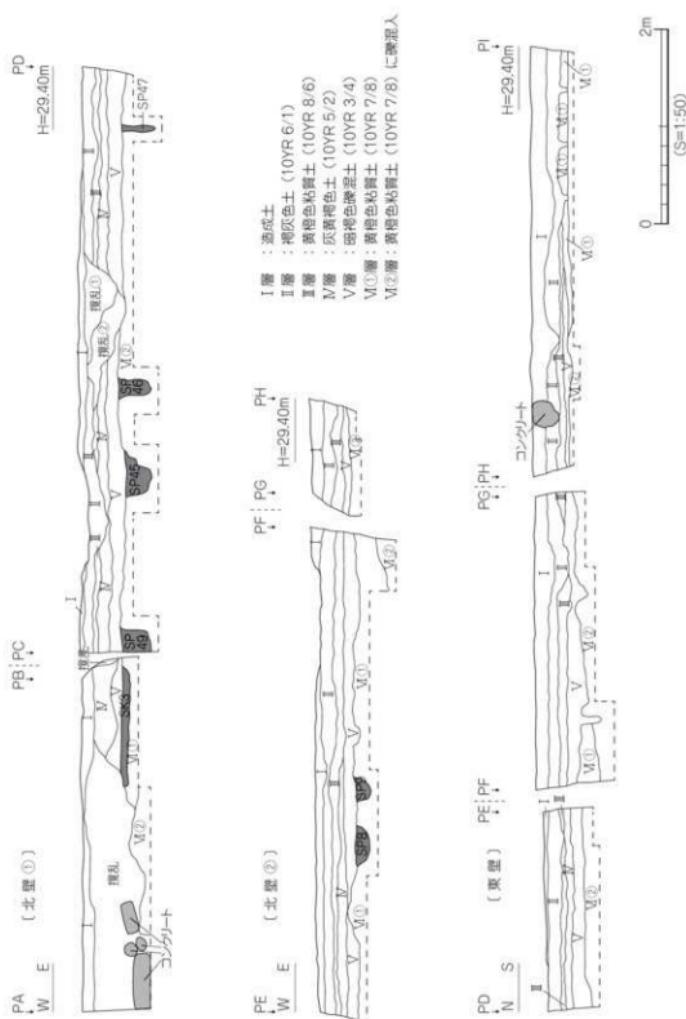
第VI層：地山層で、2層に分層した。なお、第VI層上面にて遺構検出作業を行った。

VI①層：黄橙色粘質土(10YR 7/8)で、層厚22cmまでを確認した。

VI②層：黄橙色粘質土(10YR 7/8)(礫混入)で、層厚34cm以上までを確認した。

以上の土層堆積状況から、調査地南半部は高い部分が削られ、調査地北部の低い部分は埋められ造成されたものと考えられる。なお、調査にあたり調査区内に5m四方のグリッドを設定した。

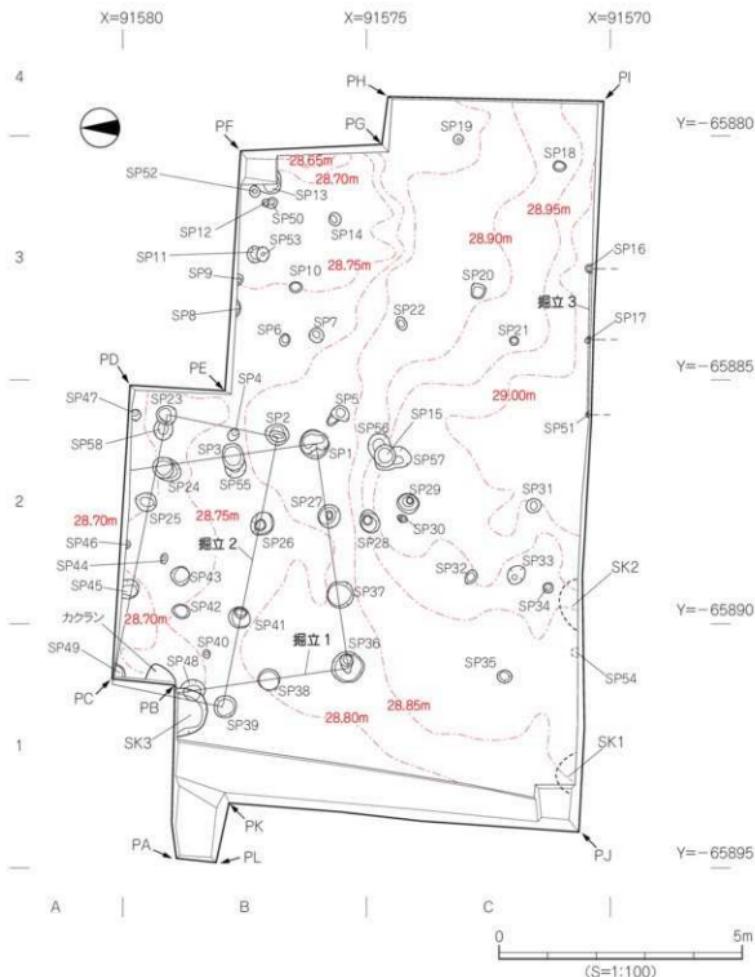
北から南方向へA・B・C、西から東方向へ1・2・3・4とグリット名を付した。また、北壁・東壁土層図(第19図)のポイント(PA・PB・PC……PL)は遺構配置図(第20図)に記している。



第19図 北壁・東壁土層図

第3節 遺構と遺物

調査では、掘立柱建物址3棟、土坑3基、柱穴58基を検出した（第20図）。遺物は、これら遺構内より弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報



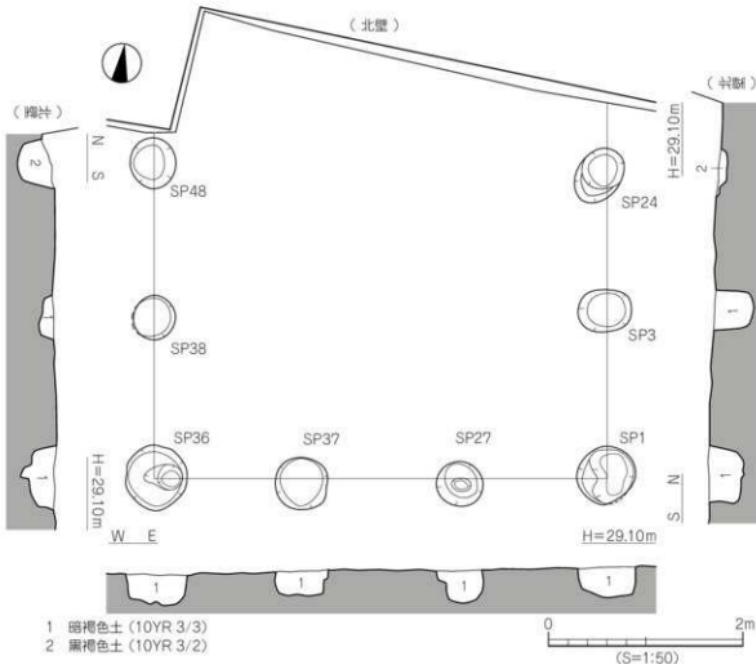
第20図 遺構配置図

31』に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び名称等が若干異なっており、取り扱いには注意していただきたい。

(1) 掘立柱建物址

掘立 1 (第 21 図、図版 9)

調査地北西部 B1 ~ 2 区に位置する。北側の柱列は調査区外に続き全容は不明であるが、東西方向 3 間、南北方向 2 間以上を検出した。建物の規模は東西長 4.66m、南北検出長 4.80m を測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形～梢円形で、規模は径 45 ~ 70cm、深さ 14 ~ 54cm を測る。柱穴埋土は、暗褐色土 (10YR 3/3) と黒褐色土 (10YR 3/2) の 2 層がある。遺物は埋土中より、弥生土器や土師器の破片と須恵器の坏身片などが出土した。

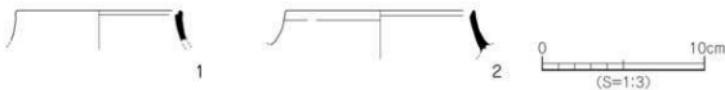


第 21 図 掘立 1 測量図

出土遺物 (第 22 図、図版 9)

1・2 は須恵器の坏身片である。口縁部のたちあがり片で、端部は段をなすものである。

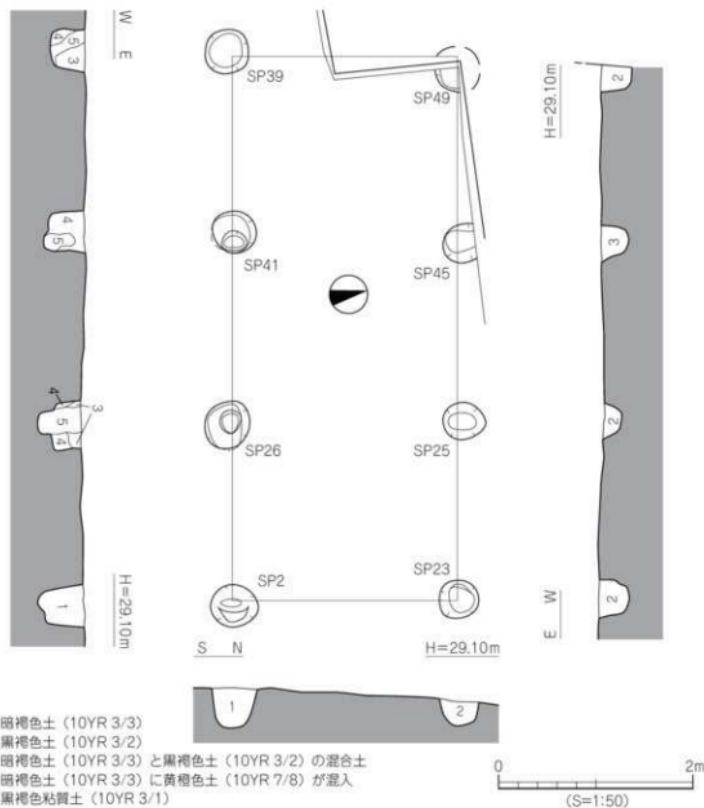
時期：出土した須恵器の特徴より古墳時代中期、5 世紀末葉と考えられる。



第22図 挖立1出土遺物実測図

掘立2(第23図、図版10)

調査地北西部A1～B2区に位置する。3間×1間の東西棟で、建物規模は東西長5.64m、南北長231mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形で、規模は径39～50cm、深さ18～48cmを測る。柱穴埋土は、暗褐色土(10YR 3/3)を基調とする。遺物は埋土中より、弥生土器や土師器の小片と須恵器の壊片などが出土した。

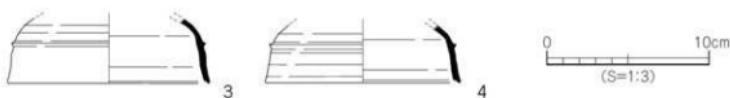


第23図 挖立2測量図

出土遺物（第 24 図、図版 10）

3・4 は須恵器の坏蓋片で、口縁端部は内傾する凹面をなすものである。

時期：出土した須恵器の特徴より古墳時代中期、5 世紀末葉と考えられる。

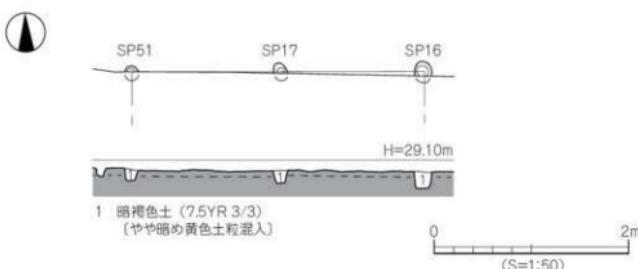


第 24 図 挖立 2 出土遺物実測図

掘立 3（第 25 図）

調査地中央西寄り C2～3 区に位置する。建物は調査区外南へ続くと思われ全容は不明で、建物北側の柱列のみ検出した。建物の規模は東西長 3.0m を測る。建物を構成する柱穴の埋土は、暗褐色土（7.5YR 3/3）〔やや暗め黄色土粒混入〕である。遺物は出土していない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、柱穴の規模、埋土から概ね中世段階の建物とする。



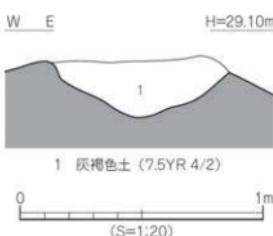
第 25 図 挖立 3 測量図

(2) 土 坑

SK 1（第 26 図、図版 11）

調査地南西隅 C1 区に位置する。南壁で確認した土坑で、平面形態は不明である。規模は東西長 0.75m、深さ 0.25m を測り、土坑南側は調査区外へと続く。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土（7.5YR 4/2）の単一層である。遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく、時期決定は困難である。



第 26 図 SK1 土層図

SK2 (第27図、図版11)

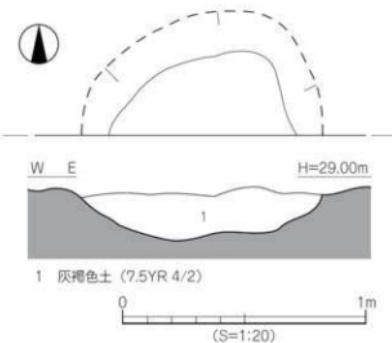
調査地南西部C1～2区に位置する。調査区南壁面と基底部のみの検出である。平面形態は不明で、規模は東西長1.00m、深さ0.23mを測り、土坑南側は調査区外へと続く。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土(7.5YR 4/2)の単一層である。遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく、時期決定は困難である。

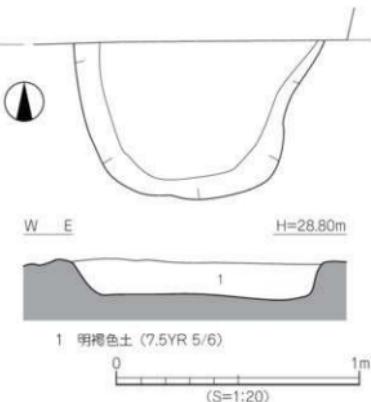
SK3 (第28図、図版11)

調査地北西部B1区に位置する。土坑北側は調査区外へと続き全容は不明であるが、平面形態は楕円形を呈すると思われる。規模は東西長1.03m、南北検出長0.66m、深さ0.16mを測る。断面形態は、逆台形である。埋土は明褐色土(7.5YR 5/6)の単一層である。遺物は弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

時期：出土した土器片は混入遺物であり時期決定は困難であるが、掘立柱建物址より後出することから、古墳時代後期以降と考えられる。



第27図 SK2 測量図



第28図 SK3 測量図

(3) 柱穴

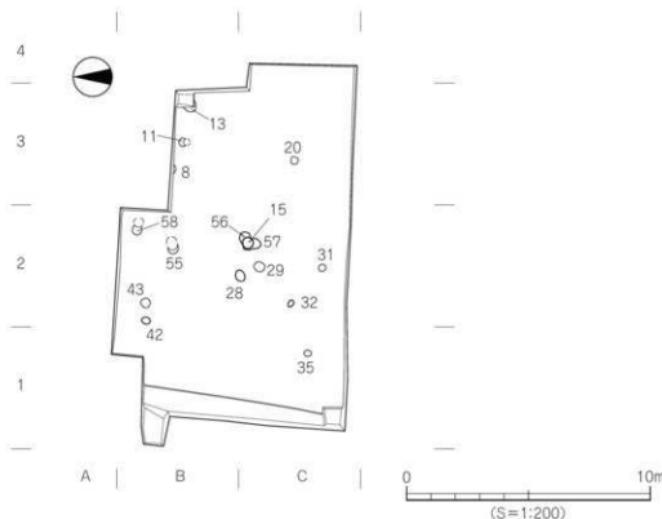
SP1～58 (図版12)

調査で検出した柱穴は、58基（掘立柱建物址柱穴19基を含む）である。整理作業の結果、柱穴規模、埋土、出土遺物から概ね古墳時代と中世に分類される。

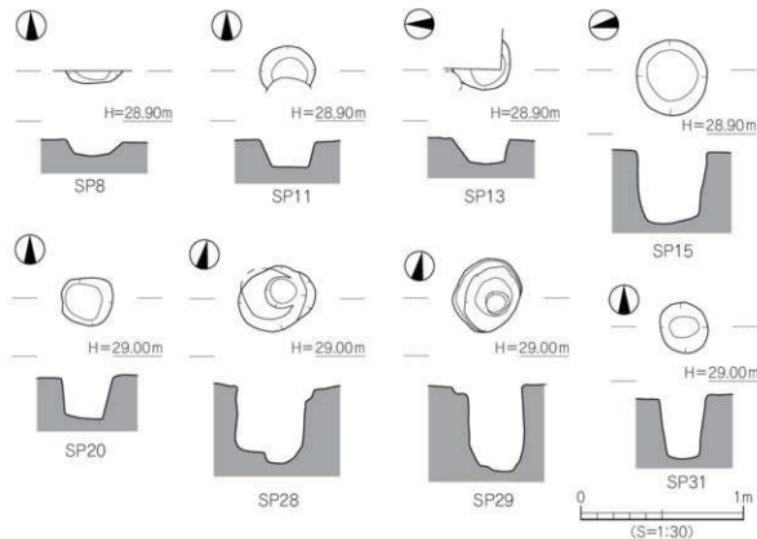
1) 古墳時代の柱穴 (第29～31図、図版12)

調査地全域に分布するが、西端部分及び南東部分では少ない。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈する。規模は長径30～52cm、短径20～44cm、深さ22～50cmを測る。埋土は暗褐色土と黒褐色土がある。遺物は土師器、須恵器の小片や、混入である弥生土器片が出土している。

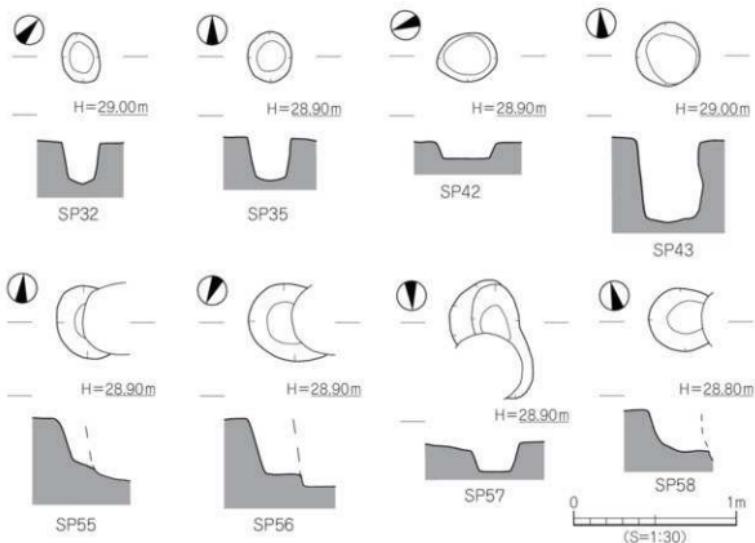
筋造 S 遺跡



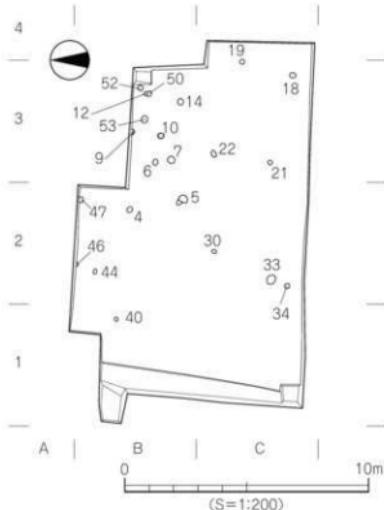
第29図 柱穴配置図（古墳時代）



第30図 柱穴測量図（古墳時代）①



第31図 柱穴測量図（古墳時代）②



第32図 柱穴配置図（中世）

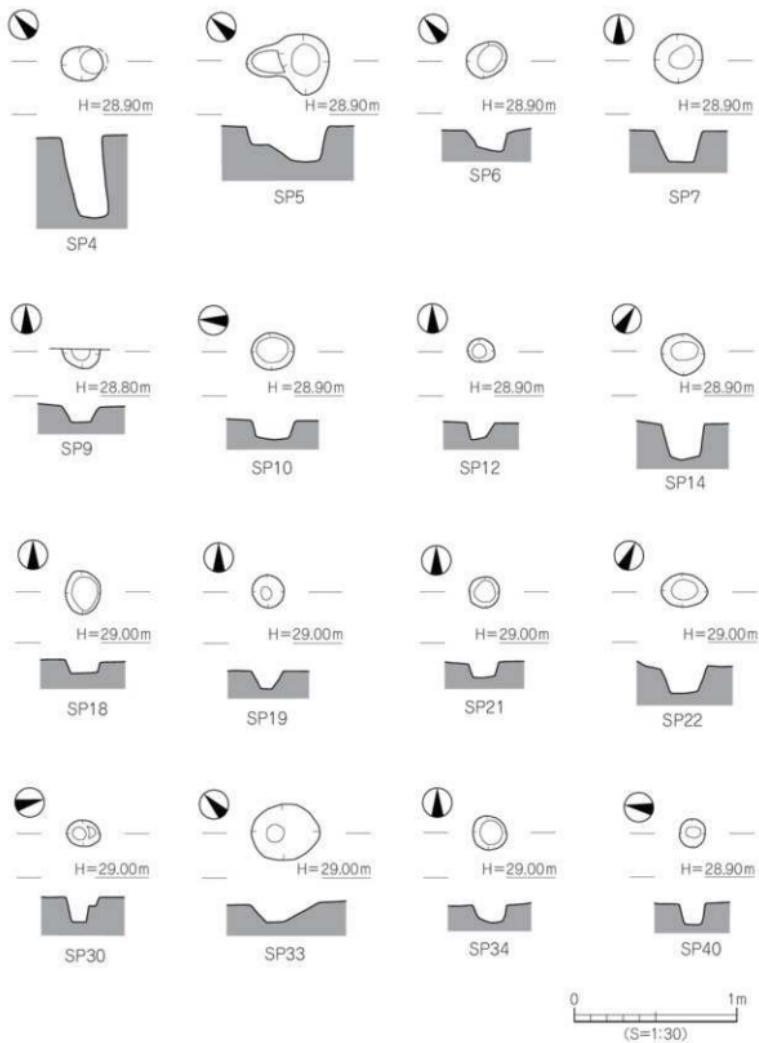
2) 中世の柱穴 (第32~34図)

調査地全域に分布するが、東半部に密度が高く西端部は低い。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈する。規模は長径16~50cm、短径13~38cm、深さ8~51cmを測る。埋土は灰褐色土とやや暗い灰褐色土がある。遺物は弥生土器や土師器、須恵器、石器の小片が出土している。

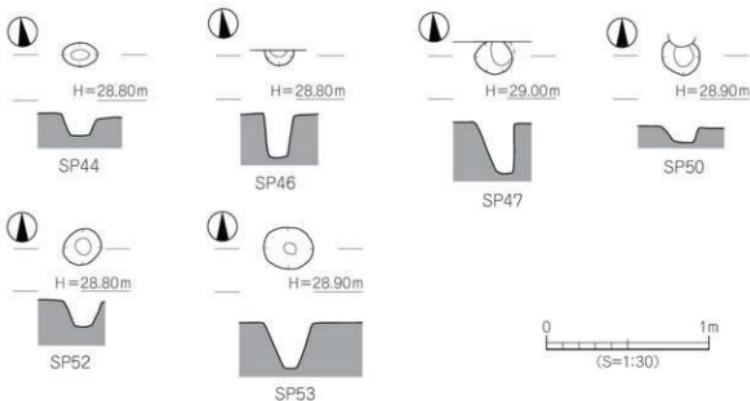
出土遺物 (第35図、図版12)

5は調査地北東隅部B3区に位置するSP52より出土した石製の鎌である。長さ23cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.77gを測る。ほぼ細部加工が施されてないため、未成品と考えられる。

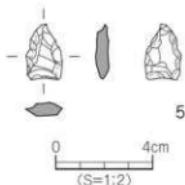
筋造 S 遺跡



第 33 図 柱穴測量図（中世）①



第34図 柱穴測量図（中世）②



第35図 SP52出土遺物実測図

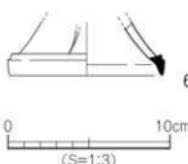
(4) 包含層・層位不明出土遺物

1) 第V層出土遺物 (第36図、図版12)

6は須恵器の高坏脚部片。脚端部付近に凸線が巡り、透かしが看取される。5世紀末。

2) 層位不明出土遺物 (第37図、図版12)

7は土師器瓶の口縁部片で、口縁端部はやや内傾している。6世紀。8は須恵器の坏蓋片。天井部と口縁部を分ける明確な棱はもたないので、口縁部は内湾して下がり、端部は丸い。6世紀後半。



第36図 第V層出土遺物実測図



第37図 層位不明出土物実測図

第4節 小 結

今回の調査では、古墳時代の集落関連遺構と遺物、中世の集落関連遺構を検出した。調査地は南東から北西に展開する微高地に位置している。調査結果から、調査地南半部は遺構密度が低く、検出された遺構の深さも浅く、南壁土層の観察では第II層直下が第VI層となることから、近現代の土地開発による削平を受けていると思われ、調査地より南方向は高くなっていたと考えられる。また、調査地中央部分より北東方向に地表面の傾斜が確認でき、北方向に位置する川附川へ落ち込む変換点であり、微高地北辺部分の一部と考えられる。

検出した古墳時代中期末葉に比定される掘立柱建物址2棟に切り合い関係が確認できず前後関係はわからないが、時間差で同じ場所に1×3間、3×2間以上規模の性格の違った建物を建てたと考えられる。同時期の遺構は調査地西隣の筋違N遺跡（第38図）でも検出されており、両遺構の遺構検出面の標高差は約40cm前後を測るが、同一集落内の建物群と考えられる。

また、中世に比定される掘立3は、建物の北辺部のみの調査となり調査区外へ続くと思われる全容は不明であるが、建物方向や柱穴規模、柱穴埋土が類似する建物址が西方80mの地点、筋違L遺跡で検出されており、この時代に於いても同一集落内の建物群を構成するものと思われる。

弥生時代の集落関連遺構は検出されなかつたが、古墳時代と中世の遺構が検出された。筋違S遺跡が立地する微高地の「筋違遺跡内での集落の変遷について」を、松山市文化財調査報告書第84集『福音寺地区の遺跡III』第5章 調査の成果と課題（山之内 志郎）で集落の変遷をまとめており、筋違S遺跡の調査で掘立柱建物址が検出されたことにより、微高地の集落遺構の資料が追加された。中世の集落変遷図に於いては、やや資料が少ないため筋違遺跡内の調査の見直し、中世の掘立柱建物址以外の土坑、井戸、溝の遺構も含めた変遷図の作成を行い、集落内の構造解明も急務と思われる。

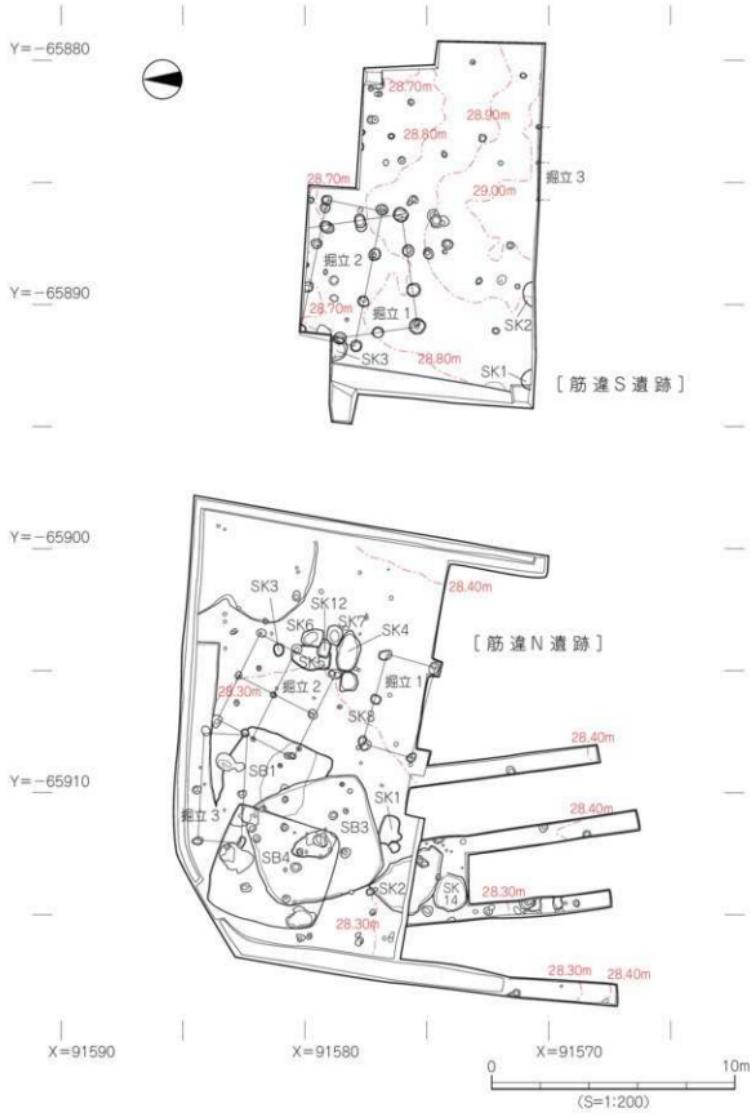
調査区が狭小であったが、建物址を検出することができた。古墳時代、中世に於いて微高地の北辺部（変換点部分）まで、集落の一部として土地利用されていたことがわかり貴重な調査成果を得られた。

【参考文献】

- 山之内志郎 1998 『福音寺地区の遺跡II』
山之内志郎 2001 『福音寺地区の遺跡III』

- 松山市文化財調査報告書第67集
松山市文化財調査報告書第84集

小 結



第 38 図 筋違 N・S 位置図

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄 グリッド名を記載。

規模欄 () : 現存値を示す。

出土遺物欄 遺物名称を略記した。例) 弥→弥生器、土→土師器、須→須恵器、石→石器

(2) 遺物観察表

法量欄 [] : 復元値、() : 残存値

胎土欄 胎土中の混和剤を略記した。例) 石→石英、長→長石

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1 ~ 4) → 「1 ~ 4mmの大石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について ○→良好

表 11 据立柱建物址一覧

据立	地区	方位	規模 (間)	桁行長 (m)	梁行長 (m)	出土遺物	時期
1	B1~2	南北	(2) × 3	4.80	4.66	弥・土・須	古墳時代中期末葉
2	A1~B2	東西	3 × 1	5.64	2.31	弥・土・須	古墳時代中期末葉
3	C2 ~ 3	東西	2 × —	3.00	—	—	中世

表 12 土坑一覧

土坑 (S K)	地区	平面形	断面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C1	不明	レンズ状	(0.75) × —— × 0.25	灰褐色土	——	不明	南壁面のみでの検出
2	C1~2	不明	レンズ状	1.00 × —— × 0.23	灰褐色土	——	不明	南壁面のみでの検出
3	B1	椭円形	逆台形	1.03 × (0.66) × 0.16	明褐色土	弥・土・須	古墳時代後期以降	

表 13 柱穴一覧

(1)

柱穴 (S P)	地区	平面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ (m)	埋 土	柱痕跡 長径 × 短径 (m)	出土遺物	備 考
1	B2	円形	0.61 × 0.61 × 0.34	暗褐色土	——	弥・土・須	掘立 1
2	B2	円形	0.46 × 0.41 × 0.47	黒褐色土	——	弥	掘立 2
3	B2	椭円形	0.54 × 0.41 × 0.41	暗褐色土	——	弥・土・須	掘立 1
4	B2	円形	0.26 × 0.21 × 0.51	灰褐色土	——	弥	
5	B2	不整形	0.50 × 0.38 × 0.21	灰褐色土	——	弥・土	
6	B3	椭円形	0.24 × 0.20 × 0.12	灰褐色土	0.10 × 0.10	——	
7	B3	円形	0.31 × 0.31 × 0.18	暗褐色土	0.14 × 0.10	——	
8	B3	椭円形	0.40 × (0.08) × 0.15	暗褐色土	——	——	
9	B3	円形	0.25 × (0.10) × 0.15	灰褐色土	——	——	
10	B3	円形	0.25 × 0.22 × 0.12	灰褐色土	——	——	
11	B3	椭円形	0.34 × (0.20) × 0.16	暗褐色土	——	弥	
12	B3	円形	0.16 × 0.13 × 0.10	灰褐色土	——	——	
13	B3	円形	0.52 × 0.48 × 0.22	灰褐色土	——	弥・土	
14	B3	円形	0.26 × 0.26 × 0.22	暗褐色土	——	——	

遺構一覧

(2)

柱穴 (S P)	地 区	平面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ (m)	埋 土	柱 痕跡 長径 × 短径 (m)	出土遺物	備 考
15	C2	円形	0.44 × 0.44 × 0.44	暗褐色土	——	弥・須	
16	C3	円形	0.25 × (0.12) × 0.15	暗褐色土	——	——	掘立 3
17	C3	円形	0.16 × (0.12) × 0.13	暗褐色土	——	——	掘立 3
18	C3	円形	0.26 × 0.24 × 0.08	暗褐色土	——	——	
19	C3	円形	0.20 × 0.20 × 0.10	暗褐色土	——	須	
20	C3	椭円形	0.31 × 0.29 × 0.26	暗褐色土	——	——	
21	C3	円形	0.18 × 0.18 × 0.08	暗褐色土	0.08 × 0.08	——	
22	C3	椭円形	0.28 × 0.22 × 0.14	暗褐色土	0.12 × 0.12	——	
23	B2	円形	0.40 × 0.37 × 0.31	黒褐色土	——	弥	掘立 2
24	B2	椭円形	0.61 × 0.45 × 0.08	暗褐色土	——	弥	掘立 1
25	B2	円形	0.42 × 0.38 × 0.18	黒褐色土	——	弥	掘立 2
26	B2	円形	0.49 × 0.47 × 0.48	暗褐色土 黒褐色土	——	弥・須	掘立 2
27	B2	円形	0.48 × 0.48 × 0.34	暗褐色土	——	弥・須	掘立 1
28	B2～C2	椭円形	0.48 × 0.41 × 0.48	暗褐色土	——	弥・土	
29	C2	椭円形	0.46 × 0.36 × 0.50	灰褐色土	0.14 × 0.14	土・須	
30	C2	椭円形	0.21 × 0.16 × 0.16	暗褐色土	——	——	
31	C2	円形	0.31 × 0.30 × 0.38	暗褐色土	0.15 × 0.15	——	
32	C2	椭円形	0.30 × 0.22 × 0.22	暗褐色土	0.10 × 0.10	——	
33	C2	円形	0.40 × 0.36 × 0.10	灰褐色土	0.13 × 0.13	——	
34	C2	円形	0.18 × 0.18 × 0.10	暗褐色土	——	——	
35	C1	円形	0.30 × 0.26 × 0.26	暗褐色土	——	——	
36	B1	円形	0.66 × 0.64 × 0.32	暗褐色土	——	弥・須	掘立 1
37	B2	円形	0.56 × 0.54 × 0.27	暗褐色土	——	弥・須	掘立 1
38	B1	円形	0.48 × 0.48 × 0.14	暗褐色土	——	弥	掘立 1
39	B1	円形	0.48 × 0.48 × 0.36	暗褐色土 黒褐色土	——	弥・土・須	掘立 2
40	B1	円形	0.18 × 0.18 × 0.14	暗褐色土	——	——	
41	B1～2	円形	0.46 × 0.46 × 0.42	暗褐色土に 黄褐色土混入	——	弥・須	掘立 2
42	B2	椭円形	0.38 × 0.32 × 0.10	暗褐色土	——	弥	
43	B2	円形	0.41 × 0.41 × 0.48	暗褐色土	——	弥	
44	B2	椭円形	0.22 × 0.16 × 0.10	暗褐色土に 黄褐色土混入	——	——	
45	B2	円形	0.42 × (0.30) × 0.28	暗褐色土 黒褐色土	——	弥	掘立 2
46	B2	円形	0.18 × (0.10) × 0.26	暗褐色土に 黄褐色土混入	——	——	
47	B2	円形	0.24 × 0.24 × 0.32	暗褐色土に 黄褐色土混入	——	——	

柱穴一覧 (3)							
柱穴 (S P)	地区	平面形	規 模	埋 土	柱 痕 跡	出土遺物	備 考
			長径 × 短径 × 深さ (m)		長径 × 短径 (m)		
48	B1	円形	0.53 × 0.48 × 0.36	黒褐色土	——	弥	掘立 1
49	A1～E1	(円形)	(0.26) × (0.24) × 0.30	黒褐色土	——	弥・土	掘立 2
50	B3	楕円形	0.22 × (0.18) × 0.14	暗褐色土	——	——	
51	C2	円形	0.23 × (0.06) × 0.13	暗褐色土	——	——	掘立 3
52	B3	円形	0.24 × 0.22 × 0.14	灰褐色土	——	石	
53	B3	楕円形	0.31 × 0.25 × 0.28	暗褐色土	——	——	
54	C1	不明	0.21 × —— × 0.18	暗褐色土	——	——	南壁面のみでの検出
55	B2	楕円形	0.46 × (0.14) × 0.24	暗褐色土	——	——	
56	C2	楕円形	0.46 × 0.24 × 0.34	暗褐色土	0.11 × 0.11	弥・土・須	
57	C2	楕円形	0.74 × (0.42) × 0.14	暗褐色土	——	——	
58	B2	楕円形	0.38 × (0.32) × 0.20	暗褐色土	——	弥	

表 14 掘立 1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)	胎 土 燐 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	环身	口径 (10.1) 残高 1.9	たちあがりは内傾し、端部は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		9
2	环身	口径 (11.6) 残高 2.6	たちあがりは内傾し、端部は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		9

表 15 掘立 2 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)	胎 土 燐 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
3	环蓋	口径 (12.4) 残高 3.8	棱は短く、口縁端部は外反し凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密 ○		10
4	环蓋	口径 (12.0) 残高 4.0	棱は外方にのびる。 端部は凹面。	回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		10

表 16 柱穴出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残 存	材 質	法 量			備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
5	礎	ほぼ完形	サスカイト	23	15	0.5	1.77	SP52 未成品 12

表 17 第 V 層出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)	胎 土 燐 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
6	高坏	底径 (9.4) 残高 3.3	脚端部付近に凸線が巡る。 透かしあり。	回転ヘラケズリ →ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	灰色 灰色	密 ○		12

表 18 層位不明出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)	胎 土 燐 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
7	瓶	口径 (23.2) 残高 5.4	口縁端部内面は、やや肥厚させ る。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1～2) ○		12
8	环蓋	口径 (11.8) 残高 2.8	棱はもたない。 器壁は厚い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		12

第5章 調査の成果と課題

本書掲載の2遺跡は松山平野東部、久米地区と福音寺地区に所在している。久米高畠遺跡74次調査は久米地区にあり、来住庵寺寺域内における重要遺跡の保護を目的とした確認調査で、平成24年度に実施した。一方、筋達S遺跡は福音寺地区にあり、個人住宅の建設に伴う本発掘調査で、平成30年度に実施している。両遺跡は、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、松山市教育委員会事務局文化財課の指導のもと、国庫補助を受けて実施した調査である。

久米高畠遺跡が所在する来住台地上では、政府や回廊状遺構をはじめとする数多くの官衙関連施設が発見されている。その一方で、松山市内における弥生時代遺跡の分布では、有数の遺跡地帯として知られている。台地上からは弥生時代前期末から中期初頭に時期比定される大量の遺物が出土した大型溝（環濠）や該期の土坑群をはじめ、中期後半から後期の竪穴建物址や掘立柱建物址、溝、土坑など数多くの遺構・遺物が発見されている。

久米高畠遺跡74次調査地は、来住台地南西縁に位置している。調査面積は約75m²であり、狭小範囲の調査ではあったが、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を確認した。調査は後世の擾乱のほかに、河川や自然流路の影響により遺構検出面や遺構内には拳大の礫が大量にみられ、遺構の遺存状況は良好ではなかった。

検出した遺構は土坑2基、溝3条、柱穴19基である。SK1は幅2m、長さ2.6mの長方形土坑で、土坑内からは弥生時代中期後半に時期比定される土器や石器が出土した。また、SK2は一辺1.7~1.9mの方形土坑で、後期後半の土器が出土している。来住台地上では、調査地東方にある来住庵寺15次調査において中期後半期の遺物が大量に投棄された状態で検出され、調査地北方の久米高畠遺跡67次調査では、後期後半期の土坑が確認されている。

土坑以外では、溝3条が検出されている。溝からは遺物の出土はみられなかつたが、土坑との重複関係より、SD1は後期後半以降、SD3は中期後半以降の溝と考えられる（SD2は時期不明）。

このほか、柱穴や包含層中からは弥生時代前期末や中期後半、古墳時代後期の遺物が出土している。なお、今回の調査では、久米官衙に関連する資料は得られなかつた。このことは、来住台地上に展開する官衙施設が調査地や近隣地域に及んでいないことを示す結果といえよう。

次に、筋達S遺跡であるが、「筋達遺跡」は昭和48年度から実施した国道11号バイパス工事に伴う発掘調査において、福音寺遺跡（筋達A区）として調査が始まり、平成21年度の筋達R遺跡まで、計18回の調査が実施されている。

これまでに実施した筋達遺跡からは、弥生時代から中世までの遺構・遺物が発見されている。福音寺地区における集落の初現は弥生時代前期と推定され、筋達L遺跡では前期前半、筋達F遺跡からは前期末の土坑が検出されている。中期の資料ではなく、後期になると竪穴建物が散見されるようになる。とりわけ、昭和63年度に実施した筋達F遺跡で検出した竪穴建物SB5からは、弥生時代後半に時期比定される一括性の高い土器が大量に出土しており、出土品は現在、松山平野における土器編年指標となっている。古墳時代では、中期から後期の竪穴建物址や掘立柱建物址などが発見され

ている。このうち、昭和 62 年度に実施した筋違 E 遺跡からは、総柱構造をもつ 5×3 間規模の大型掘立柱建物址が検出されている。このほか、注目されるものは朝鮮半島系の遺物である。福音寺遺跡（筋違 B 区）では算盤形の陶製紡錘車が出土し、平成 9 年度に実施した筋違 I 遺跡からは、竪穴建物内から繩文文タキを施す甕や瓶などが出土している。古代の遺物は未検出であるが、中世では平成元年度に実施した筋違 G 遺跡から素掘りの井戸址が検出されている。このほか、同地区内にある福音小学校構内遺跡からも建物址や井戸、墓などが検出されている。

今回実施した筋違 S 遺跡からは、古墳時代や中世の遺構・遺物を確認した。古墳時代では、中期末葉に時期比定される 2 棟の掘立柱建物が検出されている。両者は側柱構造をもつ建物址で、隣接する筋違 N 遺跡から同時期の建物址が検出されており、調査地一帯には該期の建物群が広く分布している可能性が高いと考えられる。

次に、中世では、一部のみの検出ではあるが、掘立柱建物 1 棟を確認した。建物の全容は不明であるが、柱穴規模や埋土等が調査地西方にある筋違 L 遺跡検出の建物址と類似することから、中世においても、調査地周辺地域には広範囲に集落が展開されていたものと推測される。

【参考文献】

- 森 光晴 1983 『国道 11 号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 福音寺・星ノ岡・北久米遺跡』
松山市文化財調査報告書 第 17 集
山之内志郎 2001 『福音寺地区の遺跡Ⅲ 筋違 L・N 遺跡』松山市文化財調査報告書 第 84 集

写真図版

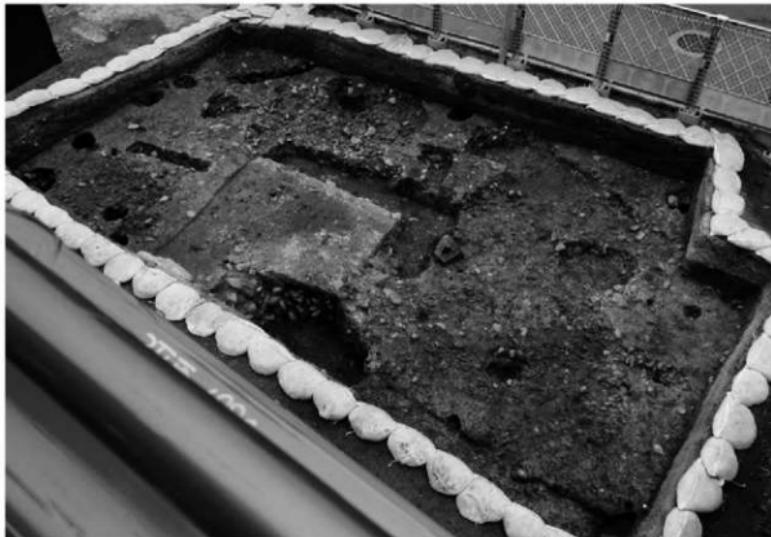
写真図版 1 ~ 6 : 久米高畠遺跡 74 次調査

写真図版 7 ~ 12 : 筋達 S 遺跡



1. 遺構検出状況（北東より）

図版
2



1. 遺構完掘状況（北東より）



2. 作業風景（北より）



1. SD1 完掘状況（北西より）



2. SD3 完掘状況（北東より）

図版
4



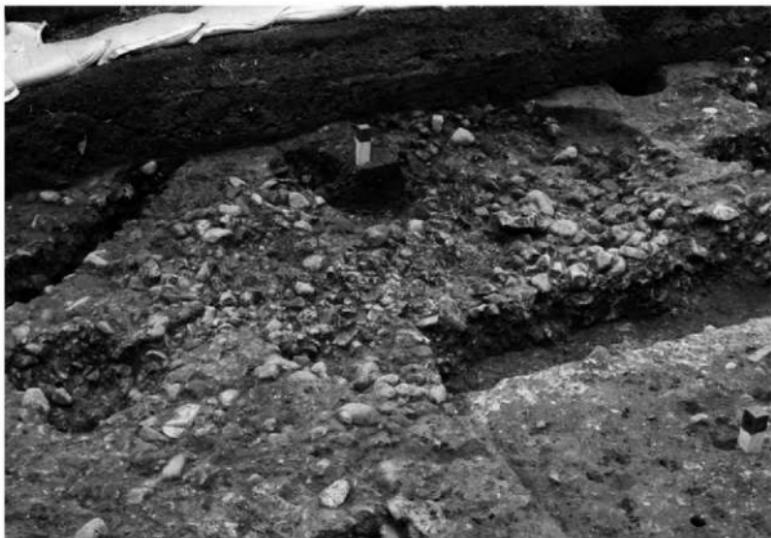
1. SK1 検出状況（南東より）



2. SK1 完掘状況（南東より）

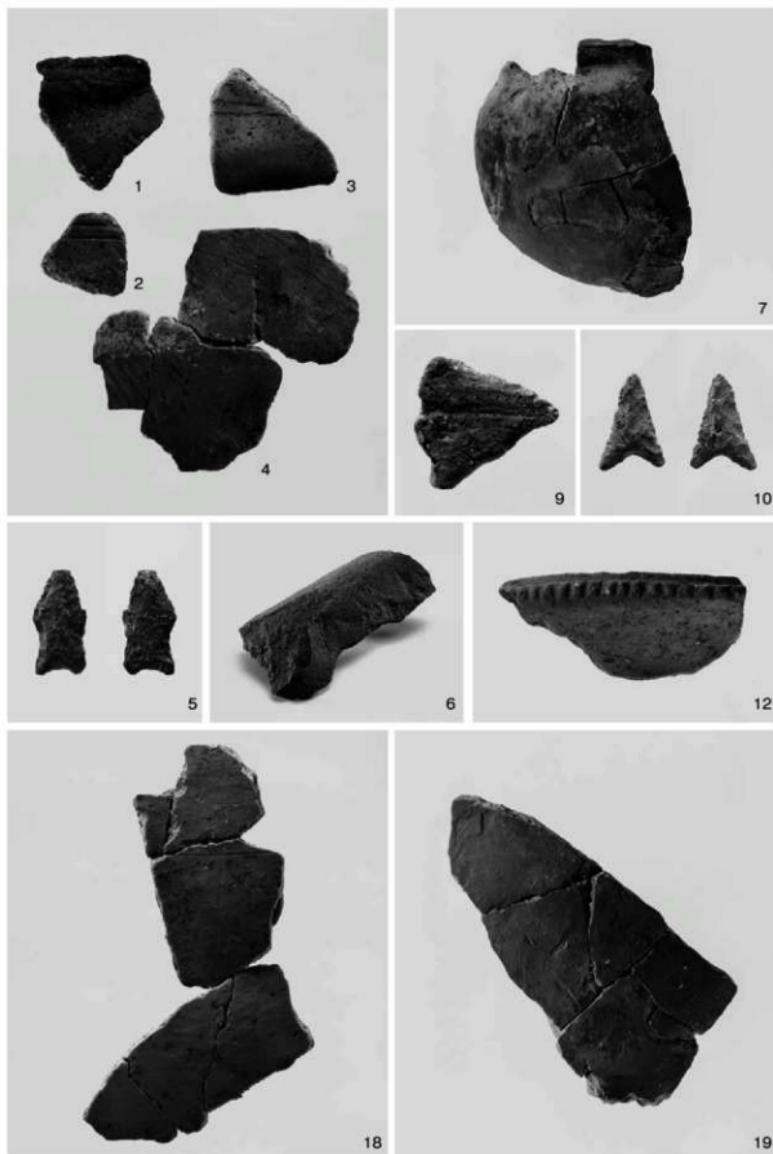


1. SK2 掘出状況（南東より）



2. SK2 完掘状況（南東より）

図版
6



1. 出土遺物 (SK1 : 1 ~ 6、SK2 : 7・9・10、SP5 : 12、第V層 : 18・19)



1. 調査前風景（北西より）



2. 造構検出状況①（南より）

図版
8



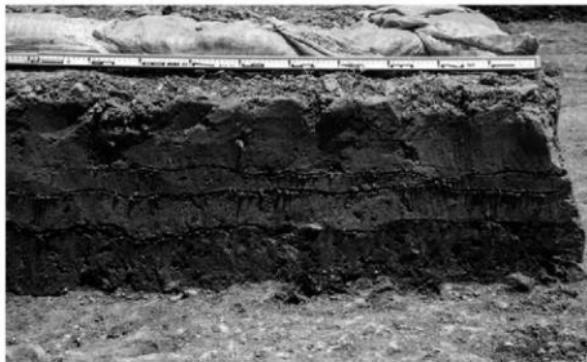
1. 遺構検出状況②
(西より)



2. 遺構検出状況③
(北より)



3. 北壁土層（南より）



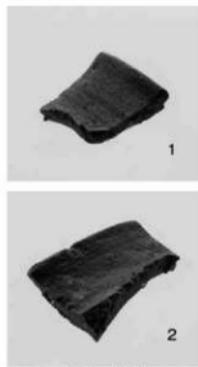
1. 東壁土層（西より）



2. 挖立 1 検出状況
(南より)



3. 挖立 1 柱穴半截状況（南より）



4. 出土遺物（挖立 1：1・2）

図版
10

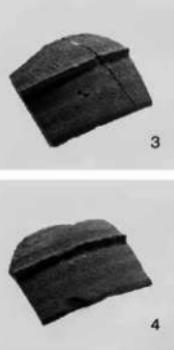


1. 挖立 2 検出状況
(南東より)



2. 挖立 2 柱穴半截状況 (南東より)

3. 出土遺物 (挖立 2:3・4)



3

4



4. 挖立 2 遺物出土状況
(南より)



1. SK1 検出状況
(北より)



2. SK2 検出状況
(北より)

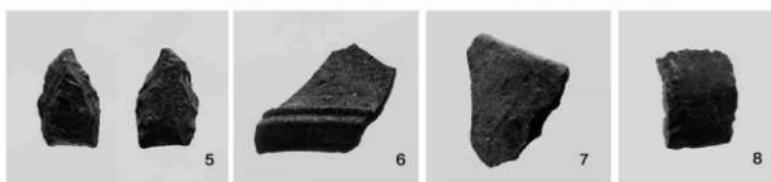


3. SK3 検出状況
(南より)

図版
12



1. SP15 遺物出土状況
(西より)



2. 出土遺物 (SP52 : 5、第V層 : 6、層位不明 : 7・8)



3. 遺構完掘状況 (南より)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	くめたかばたけいせき・すじかいえすいせき
書名	久米高畠遺跡 74次調査・筋違S遺跡
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第206集
編著者名	宮内慎一・山本健一・大西朋子
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南原院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2022(令和4)年3月15日

松山市文化財調査報告書 第206集

久米高畠遺跡 74次調査 筋違S遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

令和4年3月15日 発行

編集 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南窟院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

発行 松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 松山市湊町7丁目1-8
TEL (089) 941-9111(代)
